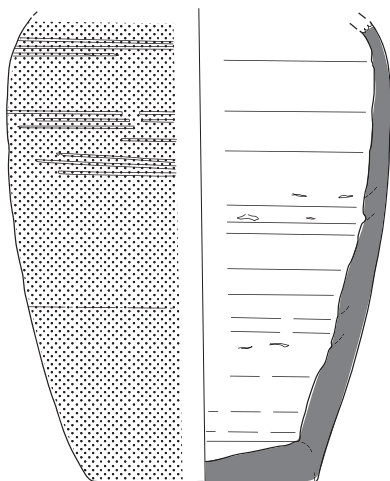


薬王院東遺跡

(第6地点第3次)

—集合住宅建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—



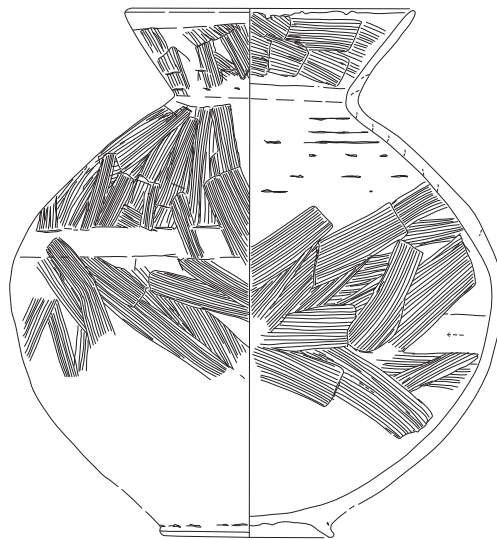
2018

水戸市教育委員会

薬王院東遺跡

(第6地点第3次)

—集合住宅建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—



2018

水戸市教育委員会

ごあいさつ

薬王院東遺跡は笠間市池野辺付近を水源とする桜川下流域の東茨城台地の上に位置しております。近隣には、地域を代表する装飾古墳の一つである「吉田古墳」をはじめとして、弥生時代から平安時代の集落であるお下屋敷遺跡、大鋸町遺跡、中世から近世の大型方形竪穴が調査された東組遺跡などが位置し、古くから住みよい土地であったと考えられます。

歴史的文化遺産である埋蔵文化財は、その性格上一度壊されてしまうと二度と原状に復することができないため、私たちが大切に保存しながら後世へ伝えていかなければならない貴重な財産です。

こうした歴史的資源のなかでも、発掘調査等の学術情報は年々増加の一途を辿り、開発と文化財保護の両立が行政としても大きな課題として懸念される所です。本市においてもその意義や重要性を踏まえ、文化財保護法並びに関係法令に基づき保護保存に努めているところです。

さて、このたびの発掘調査は、集合住宅建設工事に際して、平成29年度に実施したものです。埋蔵文化財を記録保存する発掘調査が行われました。

調査の結果、弥生時代の終わりから古墳時代の初めにかけての竪穴建物跡や中世の遺構等が発見されました。また一部ではありますが、埴輪片が出土していることなどからも、周辺に未だ確認されていない未知の古墳の存在が伺える貴重な発見もありました。

このたび刊行の運びとなりました本報告書では、このような吉田の台地の成り立ちを伺い知る最新の学術的成果が盛り込まれております。

ここに刊行いたします本書が、学術研究等の資料のみならず、水戸の誇りである歴史遺産を生かしたまちづくりの機運の高揚の一助となり、郷土の歴史を再認識されるきっかけとなりますことを期待し、ごあいさついたします。

最後になりましたが、発掘調査の実施および本書の刊行にあたり、多大な御理解と御協力を賜りました事業者 高根澤範子様、積水ハウス株式会社水戸支店、茨城県教育庁文化課の皆様には末筆ながら心から感謝申し上げます、ごあいさつの言葉いたします。

平成30年8月

水戸市教育委員会
教育長 本多 清峰

例 言


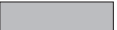


- 1 本書は、高根澤範子氏による集合住宅建設に伴う薬王院東遺跡（第6地点第3次）の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、水戸市教育委員会の指導のもと、事業主より委託を受けた株式会社日本窯業史研究所が行った。
- 3 調査の概要は下記の通りである。

所在地 茨城県水戸市元吉田町 573 - 1 他
調査面積 142 m²
調査期間 平成30年1月26日 から 平成30年2月7日
調査主体者 株式会社日本窯業史研究所（代表取締役 菅間裕二）
調査指導 新垣清貴（水戸市教育委員会事務局教育部歴史文化財課埋蔵文化財センター主幹）
調査担当者 水野順敏（株式会社日本窯業史研究所 日本考古学協会々員）
調査参加者 石崎靖也，岡崎由美子，佐藤栄次，須賀川照美，田村政子，松浦和子
- 4 本書は、水野，新垣が分担して執筆し，新垣の指導のもと，水野が編集した。遺物整理，遺構・遺物のトレース，編集には菅間智子の協力を得た。
- 5 出土遺物及び図面・写真等の記録類は，一括して水戸市埋蔵文化財センターにて保管している。
- 6 発掘調査から本書の刊行に至るまで，下記の諸機関・各位よりご指導・ご協力を賜った。御芳名を記して深く謝意を表す（敬称略・順不同）。

高根澤範子，佐々木義則，鈴木素行，山下守昭，茨城県教育庁総務企画部文化課，積水ハウス(株)，(株)小林工務店

凡 例

- 1 本書に記している座標値は，世界測地系を用いている。挿図のうち，平面図の方位記号は座標北を，土層断面図の水準線高の数値は，海拔標高をそれぞれ示す（単位：m）。
- 2 土層及び遺物の色調は『新版標準土色帳』（農林水産技術会議事務局・財日本色彩研究所監修 2008年版）に準拠する。
- 3 遺構平面図・土層断面図の縮尺は，1 / 30，1 / 60 とし，各図にスケールを明示した。
- 4 遺構及び土層説明における略称は以下の通りである。

SI：竪穴建物跡，P：小穴，SK：土坑，K：攪乱，R：粒，B：塊，KP：鹿沼パミス，焼土：，焼面：
- 5 遺物実測図の縮尺は，1 / 3 を基本とし，各図にスケールを明示した。遺物の計測数値は，cm及びgで示した。（ ）内が推定値，[]内は現存値を示す。遺物実測図の断面墨ベタは須恵器，は陶器，は施釉範囲を示す。

- 6 遺物番号は、遺構・遺物挿図、観察表、写真図版とも共通で、観察表左端の番号で示してある。
- 7 引用・参考文献は、一括して例言・凡例後に収めた。

【引用・参考文献】

- 川口武彦 2005 「水戸市下入野町出土の神子柴型尖頭器」『婆良岐考古』第27号 婆良岐考古同人会
- 川口武彦 2008a 「水戸市百合ヶ丘町出土の神子柴型尖頭器」『婆良岐考古』第30号 婆良岐考古同人会
- 川口武彦 2008b 「茨城県水戸市台渡里廃寺長者山地区・大串遺跡第7地点」第14回 古代交通研究会発表資料
- 鈴木素行 2013 「旅する「十王台式」」『ひたちなか埋文だより』38 ひたちなか市埋蔵文化財調査センター
- 関口慶久 2017 「常陸・水戸城と城下町」『北関東研究集会・伝統的武家の城下町』（シンポジウム資料）北関東研究集会・伝統的武家の城下町事務局
- 豊島区遺跡調査会 1998 「陶磁器・土器 分類・計数基準」『伝中・上富士前Ⅱ別刷』豊島区遺跡調査会
- （財）ひたちなか市文化・スポーツ振興公社編 2010 『武田遺跡群 総括・補遺編』（財）ひたちなか市文化・スポーツ振興公社文化財調査報告第40集
- （公財）ひたちなか市生活文化・スポーツ公社編 2016 『平成27年度 ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書』ひたちなか市教育委員会
- 藤澤良祐 2005 『瀬戸窯跡群』 ㈱同成社
- 水戸市教育委員会編 2005 『大鋸町遺跡』水戸市埋蔵文化財調査報告第3集
- 水戸市教育委員会編 2006 『大鋸町遺跡（第3地点）』水戸市埋蔵文化財調査報告第7集
- 水戸市教育委員会編 2009a 『吉田古墳Ⅲ』水戸市埋蔵文化財調査報告第23集
- 水戸市教育委員会編 2009b 『東組遺跡（第1地点）』水戸市埋蔵文化財調査報告第25集
- 水戸市教育委員会編 2010 『笠原水道－第6次・10次・11次発掘調査報告書』水戸市埋蔵文化財調査報告第36集
- 水戸市教育委員会編 2014 『水戸城跡発掘調査報告書Ⅰ－二の丸曲輪彰考館の調査（1）』水戸市埋蔵文化財調査報告第61集
- 水戸市教育委員会編 2017 『七面製陶所－遺構・遺物編』水戸市埋蔵文化財調査報告第100集
- 水戸市教育委員会編 2018a 『水戸城跡第63次発掘調査（大手門跡）』現地見学会資料
- 水戸市教育委員会編 2018b 『釜神町遺跡（第16地点）』水戸市埋蔵文化財調査報告第98集
- 水戸市史編纂委員会編 1963 『水戸市史』上巻 水戸市役所
- 水戸市薬王院東遺跡発掘調査会編 1990 『薬王院東遺跡』水戸市教育委員会

目 次

ごあいさつ

例言 凡例 引用・参考文献 目次

第1章 調査に至る経緯と調査の経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の方法と経過	2
第3節 基本土層	2
第2章 遺跡の周辺環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3節 薬王院東遺跡における既往の調査	6
第3章 検出された遺構と遺物	9
第1節 弥生～古墳時代	9
1. 概要	9
2. 竪穴建物跡	10
第2節 中世	15
1. 概要	15
2. 土坑	15
3. 小穴	16
第3節 時期不明遺構	18
1. 概要	18
2. 土坑類	18
3. 小穴類	20
第4節 調査区内出土遺物	20
1. 概要	20
2. 遺物	20
第4章 総括	23
第1節 土地利用の変遷の概略	23

写真図版

報告書抄録・奥付

挿 図 目 次

第1図	基本土層図	第7図	SI - 2
第2図	周辺遺跡分布図 (1 : 25,000)	第8図	SI - 2 出土遺物
第3図	薬王院東遺跡既往の調査地点	第9図	SK - 5・出土遺物
第4図	遺構配置図	第10図	P - 2・出土遺物
第5図	SI - 1・炉跡	第11図	SK - 1A ~ 4・6A ~ 7
第6図	SI - 1 出土遺物	第12図	調査区内出土遺物

表 目 次

第1表	主要な周辺遺跡一覧	第5表	中世遺物観察表
第2表	薬王院東遺跡既往の調査一覧	第6表	小穴計測表
第3表	SI - 1 出土遺物観察表	第7表	調査区内出土遺物観察表
第4表	SI - 2 出土遺物観察表	第8表	出土遺物集計表

写真図版目次

写真図版1	A. 調査区全景 (南東より) B. 調査前 (北より) C. 遺構確認状況 (南東より) D. 調査区全景 (北西より) E. 基本土層 (東より) F. SI - 1 東西土層 (南より) G. SI - 1 完掘 (南より) H. SI - 1 炉跡 (南より) I. SI - 1 炉跡掘方 (南より)
写真図版2	A. SI - 1 完掘 (北より) B. SI - 1 遺物 (第6図9) (南より) C. SI - 2 南北土層 (西より) D. SI - 2 遺物出土状態 (南より) E. SI - 2・P3 土層 (南より) F. SI - 2・P3 完掘 (東より) G. SI - 2 完掘 (東より) H. SI - 2 遺物出土状態 (南より) I. SI - 2 遺物 (第8図7) (南より)
写真図版3	A. SK - 1A・2 土層 (南より) B. SK - 1A・1B 完掘 (南より) C. SK - 2 完掘 (南より) D. SK - 3 土層 (東より) E. SK - 3 完掘 (東より) F. SK - 4 土層・完掘 (南より) G. SK - 5 完掘 (北より) H. SK - 5 西壁 (北東より) I. SK - 5 土層 (北より) J. SK - 5 遺物近接 (北より) K. SK - 6A 土層 (東より) L. SK - 6A・6B 完掘 (南より) M. SK - 7 完掘 (南より) N. P - 2 完掘 (北より) O. P - 2 遺物近接 (北より)
写真図版4	SI - 1・2 (1) 出土遺物
写真図版5	SI - 2 (2), SK - 5, P - 2, その他出土遺物

第 1 章 調査に至る経緯と調査の経過

第 1 節 調査に至る経緯

平成 29 年 4 月 15 日付けで、集合住宅建設工事に伴い、高根澤 範子（以下「事業者」という。）から水戸市教育委員会（以下「市教委」という。）教育長あて、「埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて」（教埋第 471 号）の照会があった。

照会地である水戸市元吉田町 573 - 1・5・7 は、周知の埋蔵文化財包蔵地「薬王院東遺跡」の範囲内に該当しており、遺構の存在が予想されるため、市教委の職員による現地踏査が実施された。その結果、古代以降の土師器片が採集できたことから、事業者あて事前の試掘・確認調査が必要である旨回答した。

その後、事業者側の強い要望により既存建物解体前の平成 29 年 7 月 26 日に試掘・確認調査を実施した（薬王院東遺跡第 6 地点第 1 次）。その結果、古代の竪穴建物跡 2 軒が確認されたことから、周辺においても濃密な埋蔵文化財の展開が予測され新設建物部分直下においても同様の広がりが見込まれるとの結論に至った。既存建物解体後の平成 29 年 9 月 6 日、再度、試掘・確認調査を実施した（薬王院東遺跡第 6 地点第 2 次）。その結果においても新たに古代の竪穴建物跡 2 軒、土坑 2 基、性格不明遺構 1 基が確認された。計 2 次にわたる試掘・確認調査から対象地において 4 軒の竪穴建物跡、土坑 2 基が存在することが判明した。

この試掘・確認調査での結果を鑑み市教委は、遺跡の保存について事業者と工法の変更に係る協議を実施した。協議の結果、地盤改良等が必要であるため、設計変更が困難であるとの結論に至った。

このような状況を踏まえ、市教委は平成 29 年 9 月 30 日付け教埋第 473 号にて、茨城県教育委員会（以下「県教委」という。）教育長あて、文化財保護法（以下「法」という。）第 93 条第 1 項に基づく「埋蔵文化財発掘の届出について」を提出した。これを受けて、県教委教育長から平成 29 年 10 月 17 日付け文第 1872 号「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）」にて工事着手前に発掘調査を実施すること、調査の結果、重要な遺構等が確認された場合にはその保存等について別途協議をする旨、勧告があった。

これを受けて事業者は、平成 29 年 12 月 13 日株式会社日本窯業史研究所（以下「調査機関」という。）と発掘調査業務委託契約を締結するとともに、調査機関及び市教委と発掘調査実施に係る協定を締結した。調査機関は法 92 条第 1 項の規定により、平成 29 年 12 月 26 日付け「埋蔵文化財発掘調査の届出について」（教埋 1516 号）を県教委教育長あて提出し、その後県教委教育長から調査機関へ平成 29 年 12 月 28 日付け文第 2603 号「埋蔵文化財の発掘調査について（通知）」にて、適切に発掘調査を実施するよう指示があった。

以上のような経過のもと、当該調査を薬王院東遺跡第 6 地点第 3 次調査として、平成 30 年 1 月 26 日から平成 30 年 2 月 26 日にかけて発掘調査を実施することとなった。

（新垣）

第2節 調査の方法と経過

調査区画は、世界測地系による10m方眼の大区画を設定し、X軸をアラビア数字、Y軸をアルファベットで示し、さらにこれを2m方眼の1～25の小区画に分割した。遺構外出土遺物の取り上げはこの小区画による。

確認した遺構は、竪穴建物跡は十字、土坑・小穴類は半截により土層を観察し、記録の後完掘して写真撮影を行った。写真撮影は、35mm判のモノクロ、カラーリバーサルフィルムを使用し、デジタルカメラで補足した。写真にはデータを記した黒板を写し込み、撮影には三脚及び大型脚立を用いた。平面実測は、調査区全体を縮尺1/20で作成し、計測には光波距離計を使用し、手書きで方眼紙に作図した。土層図は縮尺1/20、炉跡等の微細図は縮尺1/10で作成し、計測・作図とも人手で行った。

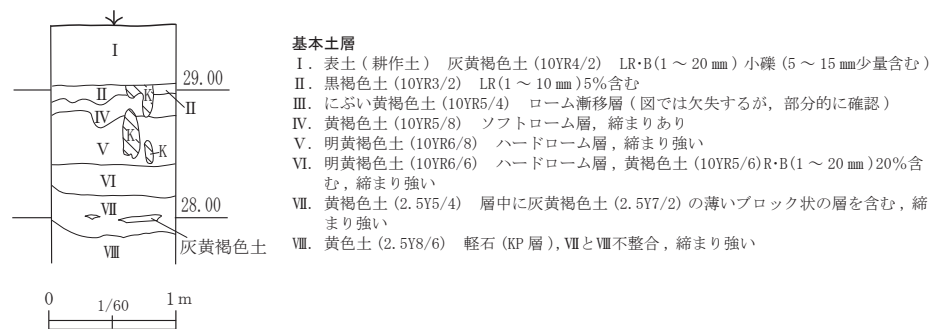
平成30年1月22日より器材の搬入、測量基準点の移動等の準備工に入り、同月26日より重機による表土除去、人力による遺構確認作業に入った。

2次にわたる試掘・確認調査の結果から古代の竪穴建物跡が2～3軒と、土坑、性格不明遺構等の存在が推測された。調査の進捗に伴い、弥生時代末～古墳初頭にかけての竪穴建物跡2軒の他土坑類9基、小穴26基などが検出された。土坑類は中世遺物が出土した第5号土坑(SK-5)以外は帰属時期を明確にし難い。小穴も、中世遺物が出土した第2号小穴(P-2)以外は帰属時期・性格等も判然としない。2月6日に市教委による終了確認を受けるとともに、全景写真の撮影、記録作業を行う。翌7日に埋め戻し作業と器材の撤収を行い、すべての野外作業を終了した。

整理・報告書作成作業は、平成30年8月まで行った。 (水野)

第3節 基本土層

遺跡は、千波湖南岸の吉田台地(標高29～30m)に立地し、基本的には北と東に向かって下降するが、調査区付近では南に向かって緩やかに下降している。現地表面から遺構確認面までの深さは西で35～39cm、東は60～65cm程であった。また、後世の土地利用の影響によって上位の土層の遺存状態が所により若干異なる。調査区南東部の状態を図示した(第1図、土層観察位置は第4図参照)。



第1図 基本土層図

第2章 遺跡の周辺環境

第1節 地理的環境

茨城県は関東平野の北東部に位置し、水戸市はその東辺中程に所在する。市域の北部を流れる那珂川は、栃木県的那須連山を水源とし、八溝山地の西縁を南に流れた後、那珂台地と東茨城台地との間を南東流して太平洋へと注ぐ。那珂川の流路には沖積低地が形成され、これに沿うように東茨城台地が東に向かって突出し、その東部は水戸台地と呼称される。水戸台地は、沢渡川・桜川・逆川により開析された支谷によって四つに細分され、北西から上市台地、見和台地、千波台地、吉田台地などと呼ばれる。

遺跡は、JR常磐線水戸駅の南方約1.2 km、桜川右岸の水戸台地の南東部にあたる吉田台地上に立地する。調査区付近の標高は29～30 m程である。かつては千波湖が水戸駅の南側まで広がっており、往時は眼下に千波湖を眺望出来る状況にあったと推察される。

(水野)

第2節 歴史的環境

薬王院東遺跡の立地する水戸台地には、縄文時代から近世にわたる遺跡が多数所在する(第2図, 第1表)。ここでは、近隣の遺跡を中心に概観する。

旧石器時代 近隣においては、大鋸町遺跡(水戸市教育委員会編 2006)の他は明確な調査事例は管見に触れなかったが、採集遺物等に良好な資料の存在が知られており、該期における土地利用を示唆する(川口 2005, 2008a)。

縄文時代 千波湖北岸の上市台地では釜神町遺跡が該期の遺跡として知られる。南側の千波・吉田台地では、本遺跡を初め水戸南高校遺跡、吉田貝塚、お下屋敷遺跡、大鋸町遺跡、下本郷遺跡、柳崎貝塚等早期～晩期にわたる多数の遺跡が所在する。本遺跡の既往の調査では、早期の土器片が出土し、中期の竪穴状遺構が確認されている(水戸市薬王院東遺跡発掘調査会編 1990)。

弥生時代 近隣においては後期以降の遺跡が殆どである。吉田台地上の遺跡としては、お下屋敷遺跡、東組遺跡、大鋸町遺跡や本遺跡の既往の調査などで後期十王台式期の竪穴建物跡が確認されている。さらに、横宿遺跡、酒門台遺跡、吉田神社遺跡などにおいて十王台式の土器が採集されており、本遺跡の周辺には該期の遺跡が密に所在する。

古墳時代 近隣における前期の遺跡としては大鋸町遺跡、東組遺跡、お下屋敷遺跡などが知られる。なお、初期段階には弥生時代後期末葉の十王台式土器の伴出、あるいはその影響を強く受けたと思われる土師器の存在が注目され、今次調査区においても同様の状況が認められた。近隣に該期の古墳の存在は管見に触れなかった。続く中期の集落跡としては古式須恵器が出土した大鋸町遺跡(水戸市教育委員会編 2005)が知られるのみである。この時期の古墳も近隣には確認されておらず、上市台地上に所在する愛宕山古墳(全長146 m, 前方後円)が該期の所産と考えられている。後期の集落跡は、北に隣接する水戸南高校遺跡や東隣りの大鋸町遺跡を初め、広範囲な分布を示すが、7世紀代後半に至る

第2章 遺跡の周辺環境



第2図 周辺遺跡分布図（1：25,000）

第1表 主要な周辺遺跡一覧

遺跡番号	遺跡名	所在地	種類	現況	時代・時期						備考	
					旧石	縄文	弥生	古墳	奈平	中世		近世
201-007	水戸南高校遺跡	白梅2丁目	集落跡	校地		○	○	○				隠滅
201-008	吉田貝塚	元吉田町井坂	貝塚	道路		○						
201-009	安楽寺遺跡	元吉田町安楽寺	集落跡	境内		○			○			
201-010	お下屋敷遺跡	白梅2丁目	集落跡	校地		○	○	○	○			隠滅
201-011	大鋸町遺跡	元吉田町	集落跡	宅地	○	○	○	○	○	○		
201-012	下本郷遺跡	千波町下本郷	集落跡	宅地		○						
201-020	釜神町遺跡	備前町	集落跡	宅地		○		○	○		○	
201-041	東照宮境内遺跡	宮町2丁目	集落跡	境内			○	○				隠滅
201-057	横宿遺跡	元吉田古宿	集落跡	畑地		○	○	○				隠滅
201-058	米沢町遺跡	元吉田町荒谷	集落跡	宅地		○	○	○	○	○		
201-072	吉田古墳群	元吉田町東組	古墳群	宅地		○		○	○		○	1号墳は国指定
201-101	吉田城跡	元吉田町	城館跡	境内						○		
201-103	横竹隈遺跡	柳町2丁目	城館跡	宅地						○		隠滅・名称変更
201-128	薬王院東遺跡	元吉田町東組	集落跡	宅地		○	○	○	○	○		
201-142	鷹匠町遺跡	梅香2丁目	火葬墓	宅地					○			隠滅・名称変更
201-146	柳崎貝塚	千波町柳崎	貝塚	宅地		○						
201-160	酒門台遺跡	酒門町台	集落跡	畑地			○	○	○			
201-161	吉田神社遺跡	宮内町	集落跡	境内	○		○	○	○	○		
201-172	水戸城跡	三の丸1丁目	城館跡	学校	○	○	○	○	○	○		
201-174	笠原水道	笠原町	水道跡	境内							○	
201-287	七面製陶所跡	常盤町1丁目	生産遺跡	山林							○	
201-290	東組遺跡	元吉田町東組	集落跡	宅地		○	○	○	○	○		
201-301	舟付遺跡	千波町舟付	包蔵地	宅地						○		新規登録
201-302	元吉田原遺跡	元吉田町原	包蔵地	宅地				○	○			新規登録

と一旦途絶え、後に官衙施設が設けられる台渡里地区と大串地区に集中する傾向が認められる（川口 2008b）。この時期に入ると各所に群集墳が築かれるようになり、本遺跡の西に隣接して吉田古墳群が所在する。その盟主的存在の吉田古墳（1号墳）は、八角形墳で石室奥壁に壁画が見られ国指定史跡となっている（水戸市教育委員会編 2009a）。

奈良・平安時代 古代における当地は、常陸国那賀郡吉田郷に属していた。当国は東海道に属し、11郡を管する大国である。このうち那賀郡は22郷を管する大郡で、その中心となる郡家などは市内台渡里官衙遺跡群に比定されている。正倉院の他に郡名寺院の存在が知られ、近隣に郡庁院の存在が推測される。また、付近には河内駅家に比定される田谷遺跡（廃寺）も所在する。なお、前述の大串地区の大串遺跡は、郡家の別院の可能性が高く、東方に推定されている平津駅家との密接な関係が想定されている（川口 2008b）。8世紀以降の集落跡は再び市内各所に見られるようになり、西に隣接する東組遺跡や東の大鋸町遺跡、北西のお下屋敷遺跡などに見られ、本遺跡の既往の調査区でも38軒の竪穴建物跡が確認されている。しかし、9世紀以降、弘仁3（812）年の河内駅家の廃止、10世紀初頭の台渡里廃寺の廃絶など律令体制の衰退が目立つようになる。これに反して遺跡の北に隣接する吉田神社が次第に勢力を増し、10世紀前半には那賀郡から吉田郡が独立（私称）する程となる。また、これを追うように武士団が吉田郡に進出し、12世紀前半までには常陸平氏である吉田氏が吉田郡を勢力下に置いたと見られる。

中世 鎌倉幕府の成立とともに、吉田氏及びその一族である石川・馬場氏らが御家人となり、地頭職として吉田郡内を治めた。吉田氏の居館に比定されるのが本遺跡の東方に所在する吉田城である。また馬場氏は上市台地の現水戸城本丸付近に居館を構えたと伝えられる。応永23（1416）年、河和田城主江戸通房が馬場氏に取って変わり、この地を本拠地とする。この時期吉田城は、水戸城の出城的存在であったと思われる。天正18（1590）年、常陸一国を領有した佐竹義宣が江戸氏を滅して常陸太田より水戸城に移り、城と城下を整備した。この頃には吉田城は役目を終えて、廃城となったと考えられる。該期の遺跡としては、近隣では東組遺跡、大鋸町遺跡、米沢町遺跡、酒門台遺跡などが知られ、本遺跡の既往の調査区や今次調査区でも若干の遺構・遺物が確認された。

近世 慶長7（1602）年、佐竹氏は関ヶ原の合戦における対応から秋田へ移封となり、徳川家康の五男武田信吉が入部したが翌年嗣子無く病没し、十男頼将（後の頼宣）が入部する。慶長14（1609）年、頼宣が駿府へ移封となり十一男の頼房が入部し、水戸徳川家の祖となる。頼房は水戸城と城下を整備して、二の丸に居館（御殿）を構えた。元禄11（1698）年には2代藩主光圀によって二の丸に水戸彰考館が開設され、以後『大日本史』編さんの舞台となる。また、光圀は下市地区の水不足対策として笠原水道を敷設した。「神崎岩」と呼ばれる軟質の石材を加工した岩樋を用い、延長10.7kmに及ぶものである（水戸市教育委員会編 2010）。9代藩主斉昭は天保12（1841）年、三の丸に藩校弘道館を設立、翌天保13（1842）年には偕楽園を開園している。さらに、殖産興業の一環として偕楽園の崖下に七面製陶所を設けるなどした（水戸市教育委員会編 2017）。

なお、水戸城跡においてはこれまで水戸市教育委員会、茨城県教育財団などにより60数次に及ぶ試掘・発掘調査が重ねられ、種々の貴重な知見・資料が得られている。殊に、二の丸曲輪彰考館の調査や（水戸市教育委員会編 2014）、大手門瓦塀の調査（水戸市教

育委員会編 2018a)などは注目される。また、武家地の釜神町遺跡(水戸市教育委員会編 2018b)、町人地としての東組遺跡(水戸市教育委員会編 2009b)など城下の状況も明らかとなりつつある。(水野)

第3節 薬王院東遺跡における既往の調査

薬王院東遺跡の調査は本報告書地点までで計第6地点において行われている。これらの調査は、その多くが個人住宅建築等に伴う、調査範囲の狭小な試掘・確認調査であるが、いずれの年代も弥生時代後期から古墳時代前期への過渡期、古代から中世の時期が本遺跡の占める最も活発な土地利用の時期であるとみられる。

このうち、本発掘調査に至った箇所はいずれも今般地点より南東に位置する第1地点と本報告書の地点である第6地点のみである。

第1地点は平成元年に千波中学校建設に際して大規模な発掘調査が実施されており、北側と南側でそれぞれ第2調査区・第1調査区に分けて発掘調査が実施されている。調査では弥生時代の竪穴建物跡が10軒、古代の竪穴建物跡が37軒、その他、中世以降の井戸跡、工房跡、粘土採掘坑、溝跡である。大勢としては古代が最も多い。北側の第2調査区では、工房跡、溝跡が確認された程度で、9世紀前半と後半の竪穴建物跡がそれぞれ2軒である。濃密な土地利用の展開は明らかに南側の第1調査区に多くみられ、弥生時代の竪穴建物跡が10軒、8世紀段階の竪穴建物跡が11軒、9世紀の竪穴建物跡が21軒である。

第2地点では宅地造成工事に伴い計6次にわたる試掘・確認調査が実施されており、弥生時代後期から古墳時代にかけての竪穴建物跡が計4軒確認されている。

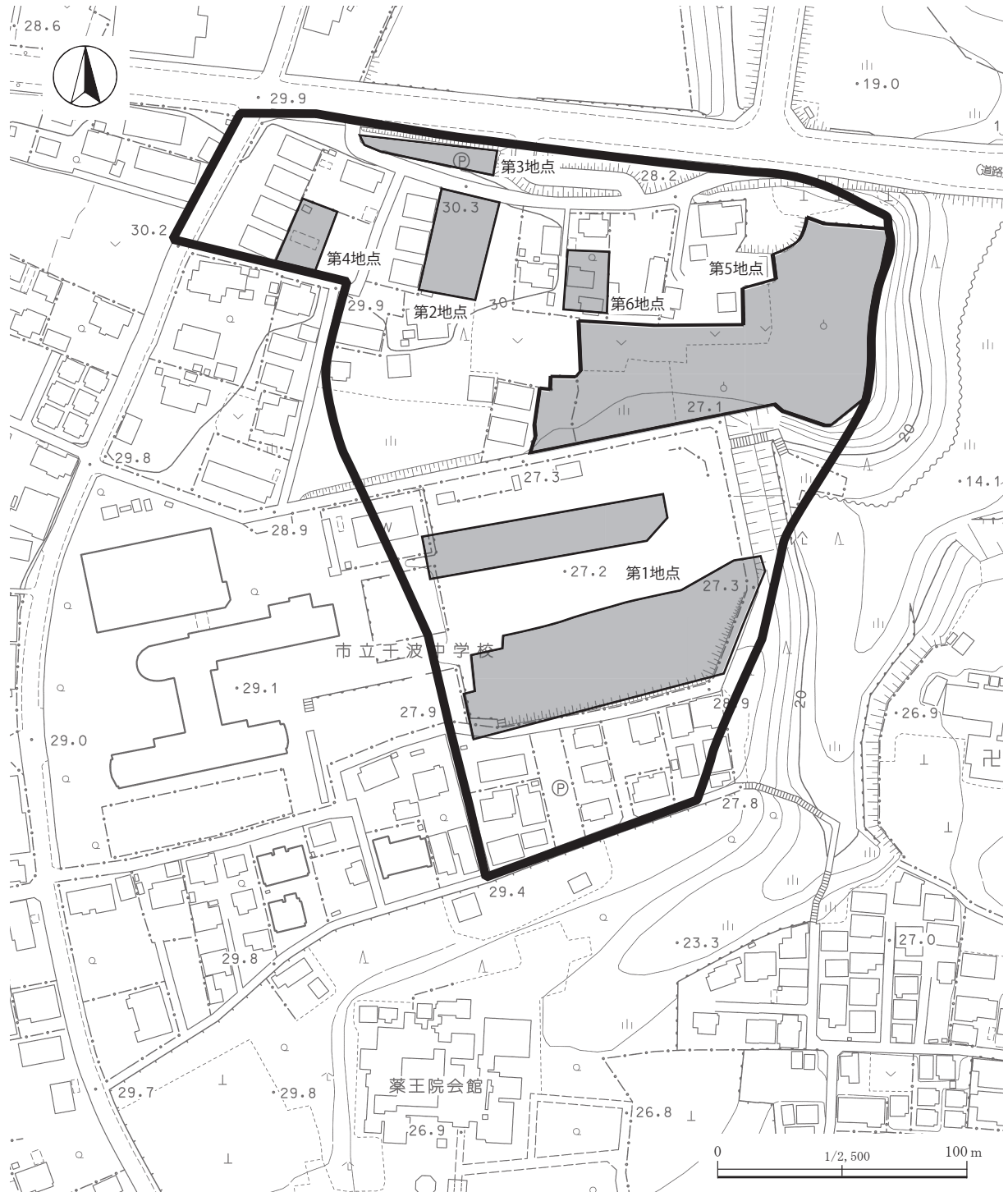
第3地点は第2地点の北側にあたり、時期不明の溝跡3条、竪穴建物跡1軒が確認されている。第4地点は、第2地点の西隣に位置し、古墳時代の竪穴建物跡1軒が確認されている。また第5地点は、第6地点の東側に位置し、弥生時代後期の竪穴建物跡が2軒確認されている。

このように、薬王院東遺跡では、第6地点までの調査を俯瞰して遺構の分布をみると、第1地点の間に位置する支谷を隔てて、北側と南側のそれぞれの台地で、土地利用の時期が概ね異なることがわかる。弥生時代後期から古墳時代前半にかけての遺構の展開は北側と南側とで概ね同様の展開であるが、北側台地では、8世紀段階に一度集落利用が低調となるようで、南側台地のみの展開である。このことは近年の第2地点から第6地点の試掘・確認調査は北側台地において行われているが、いずれも8世紀代の遺構が確認されないことから明白である。

南側台地は、弥生時代後期から古代、そして中世と若干の盛衰をみるが連綿とした土地利用の傾向が伺える。なかでも、9世紀前半以降の遺構数の増加が最も顕著であり、南側台地で21軒確認されている。この事実は本遺跡の南東に近接する大鋸町遺跡との関係が強く示唆される。

また、中世における土地利用が確認されるのは、第1地点の調査での14世紀以降に比定される井戸跡や、本報告地点である土坑1基などであるが、古瀬戸後期前半の14世紀後半から15世紀前半といずれも時期的に近い。また本遺跡が位置する吉田台地一帯は吉田神社や薬王院など中世江戸氏の強力な庇護を背景とした社寺が存在し、中世の土地利用

も、この社寺と無関係とは到底考えづらい。薬王院も平安時代の創建とされ、大永7（1527）年に本堂伽藍が焼失したとされる。このことから16世紀半ば前には土地利用が始まっていることは間違いなく、本遺跡周辺での中世の土地利用は、これら有力な社寺の建物が背景にあると推察できる。（新垣）



第3図 薬王院東遺跡既往の調査地点

第2表 薬王院東遺跡既往の調査一覧

地点数	回数	調査箇所	調査年月日	調査原因	遺構	遺物	備考
1	1	元吉田町 599-2 (千波中学校)	平成元年 4月11～8月10日	学校建設	○	○	平成元年本発掘調査
2	1	元吉田町 573-2・10～12	平成 21年 1月28日	宅地造成	○	○	弥生時代後期竪穴建物跡2軒, 古墳時代前期竪穴建物跡2軒
2	2	元吉田町 573-2・10～12	平成 21年 12月16日	宅地造成	—	○	—
2	3	元吉田町 573-15	平成 22年 7月15～7月16日	個人住宅	○	○	竪穴建物跡1軒
2	3	元吉田町 573-16	平成 22年 7月15～7月16日	個人住宅	—	—	—
2	3	元吉田町 573-17	平成 22年 7月15～7月16日	個人住宅	○	○	竪穴建物跡1軒
2	4	元吉田町 573-20	平成 23年 2月10日	個人住宅	○	○	—
2	5	元吉田町 573-2	平成 23年 5月19日	個人住宅	○	○	弥生～古墳時代竪穴建物跡1軒
2	6	元吉田町 573-18	平成 23年 6月30日	個人住宅	○	○	古墳時代竪穴建物跡1軒
3	1	元吉田町 550-1	平成 25年 5月15日	賃貸住宅	○	○	溝跡3条・竪穴建物跡1軒・ピット1基
4	1	元吉田町 574-1	平成 25年 11月12日	福祉施設	○	○	古墳時代竪穴建物跡1軒
5	1	元吉田町 555・554-1・2・6 他	平成 25年 12月8日～12月15日	宅地分譲・共同住宅	○	○	弥生時代竪穴建物跡1軒
5	2	元吉田町 555・554-1・2・6 他	平成 28年 1月8日	宅地分譲・共同住宅	○	○	弥生時代竪穴建物跡1軒
6	1	元吉田町 573-1・5・7	平成 29年 7月20日	集合住宅兼個人住宅	○	○	古墳時代竪穴建物跡1軒
6	2	元吉田町 573-1・5・7	平成 29年 9月6日	集合住宅兼個人住宅	○	○	古墳時代竪穴建物跡1軒
6	3	元吉田町 573-1・5・7	平成 30年 1月26日～2月7日	集合住宅兼個人住宅	○	○	本報告書

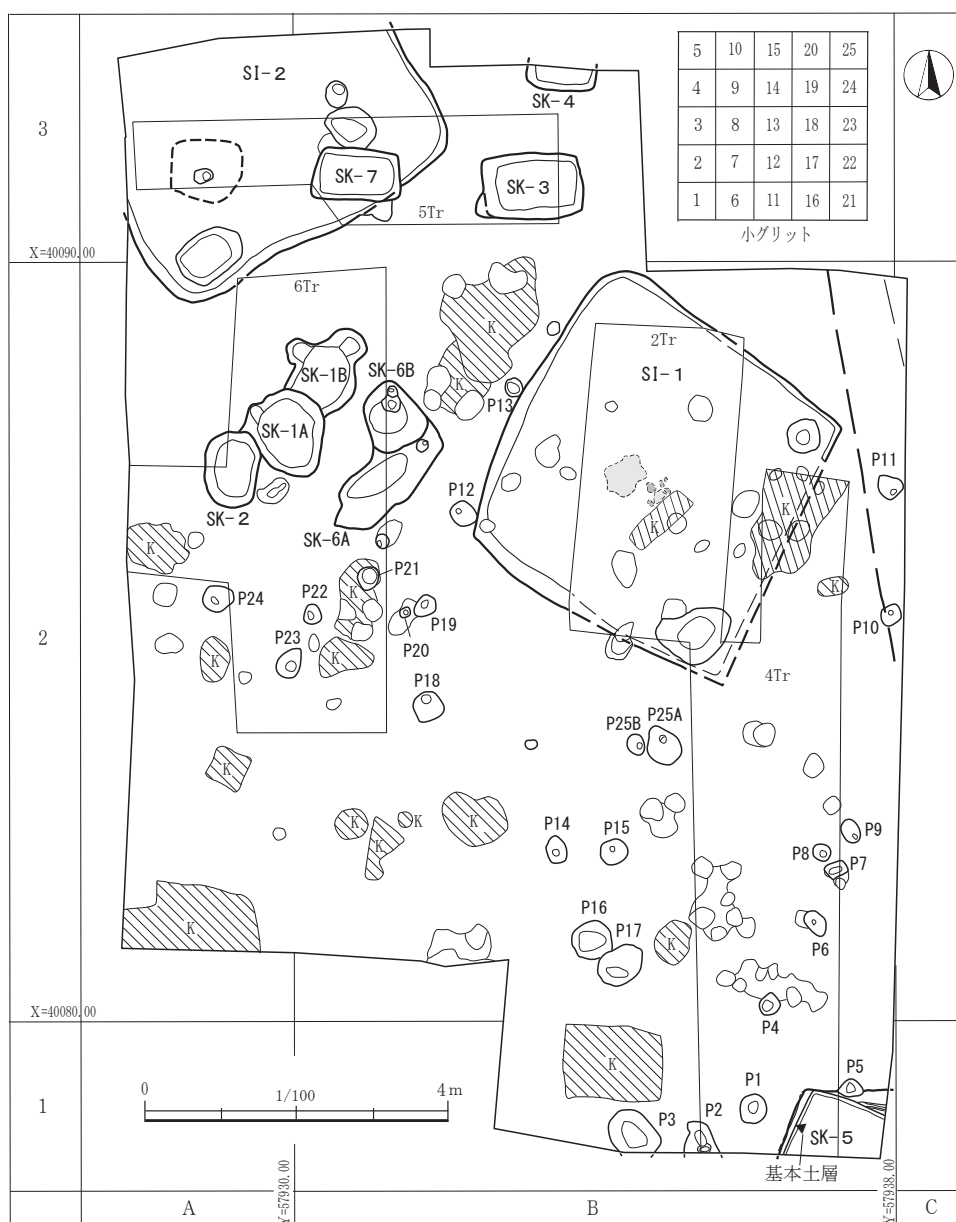
第3章 検出された遺構と遺物

今次調査区では、古墳時代前期の竪穴建物跡2軒（SI-1・2）、中世の土坑（SK-5）、小穴（P-2）各1基、時期不明の土坑8基（SK-1A～4・6A～7）、小穴25基（P-1・3～25B）などが確認された。遺物は、縄文土器（中・後期）・石器、弥生土器、古墳時代の土師器・埴輪、奈良・平安時代の土師器・須恵器、中世の陶器（古瀬戸）・土師質土器（内耳鍋）などが出土した。

第1節 弥生～古墳時代

1. 概要

該期の遺構は竪穴建物跡2軒である。遺物は弥生時代後期後～末葉の土器56点、古墳



第4図 遺構配置図

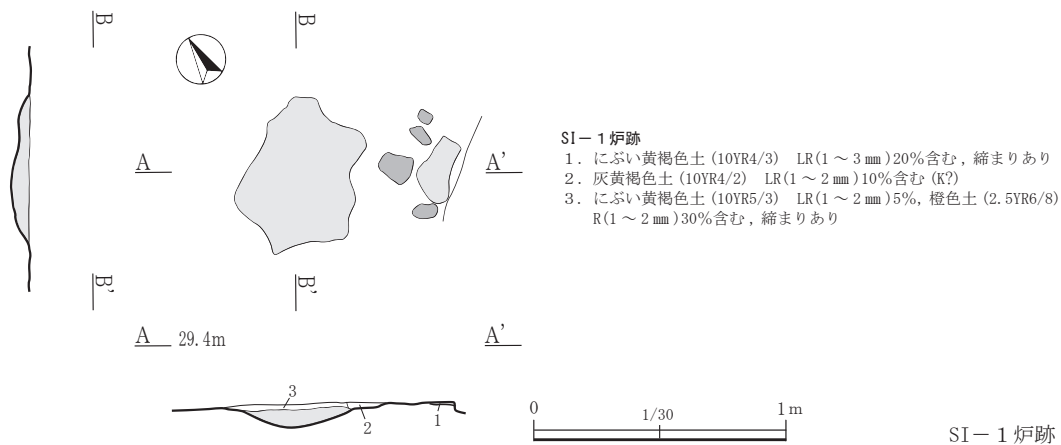
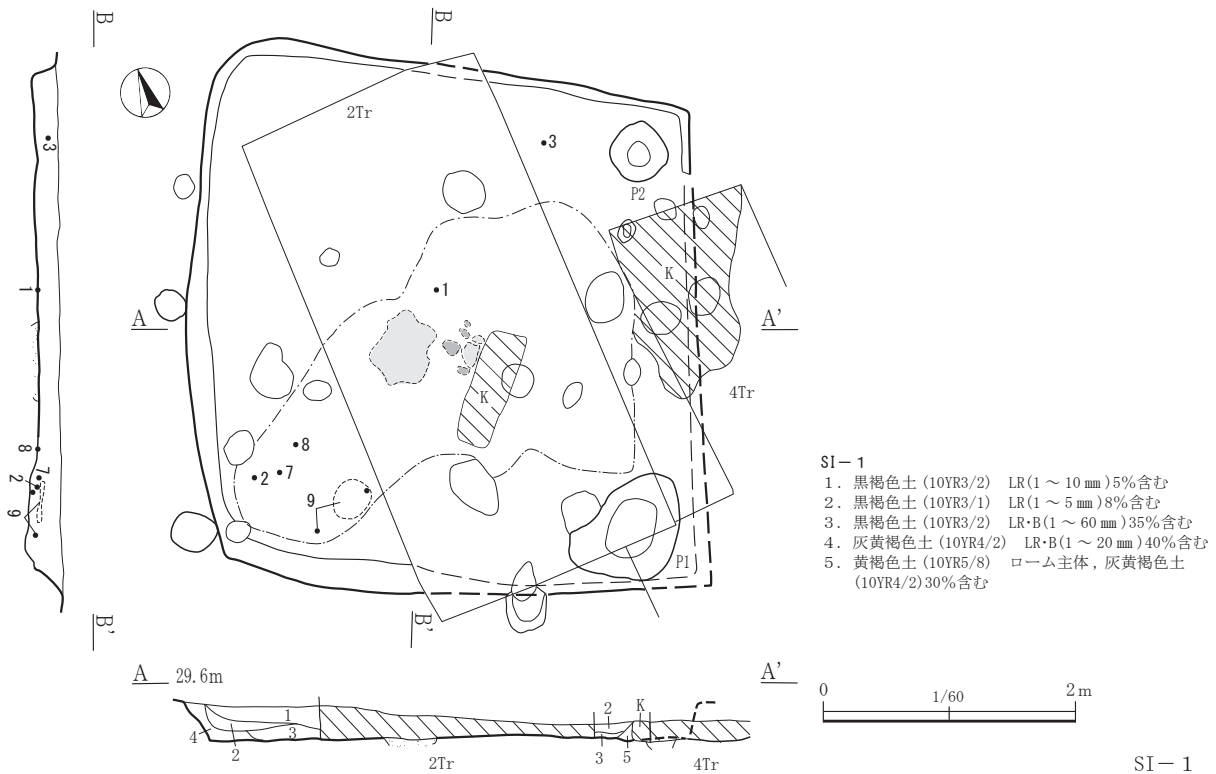
時代前期の土師器 255 点，古墳時代後期の土師器 5 点，円筒埴輪 1 点などである。小穴類で該期の遺物を出土したものもあるが，時期を特定し難く，第3節に一括した。

2. 竪穴建物跡

第1号竪穴建物跡 (SI-1) (第5・6・12図，第3・7・8表，写真図版1F～2B・4・5)

遺構 調査区の中央やや東寄りに所在し，北西約2.7mにSI-2が隣接する。竪穴の中央部と東側に，試掘調査時の2Tr・4Trが確認され，ともに床面まで達していた。また，各所に後世の攪乱が認められ，遺構の遺存状況は良好とは言えない。

平面形・規模は北東・南西長約4.2m，北西・南東長約4mのほぼ方形，主軸方位はN



第5図 SI-1・炉跡

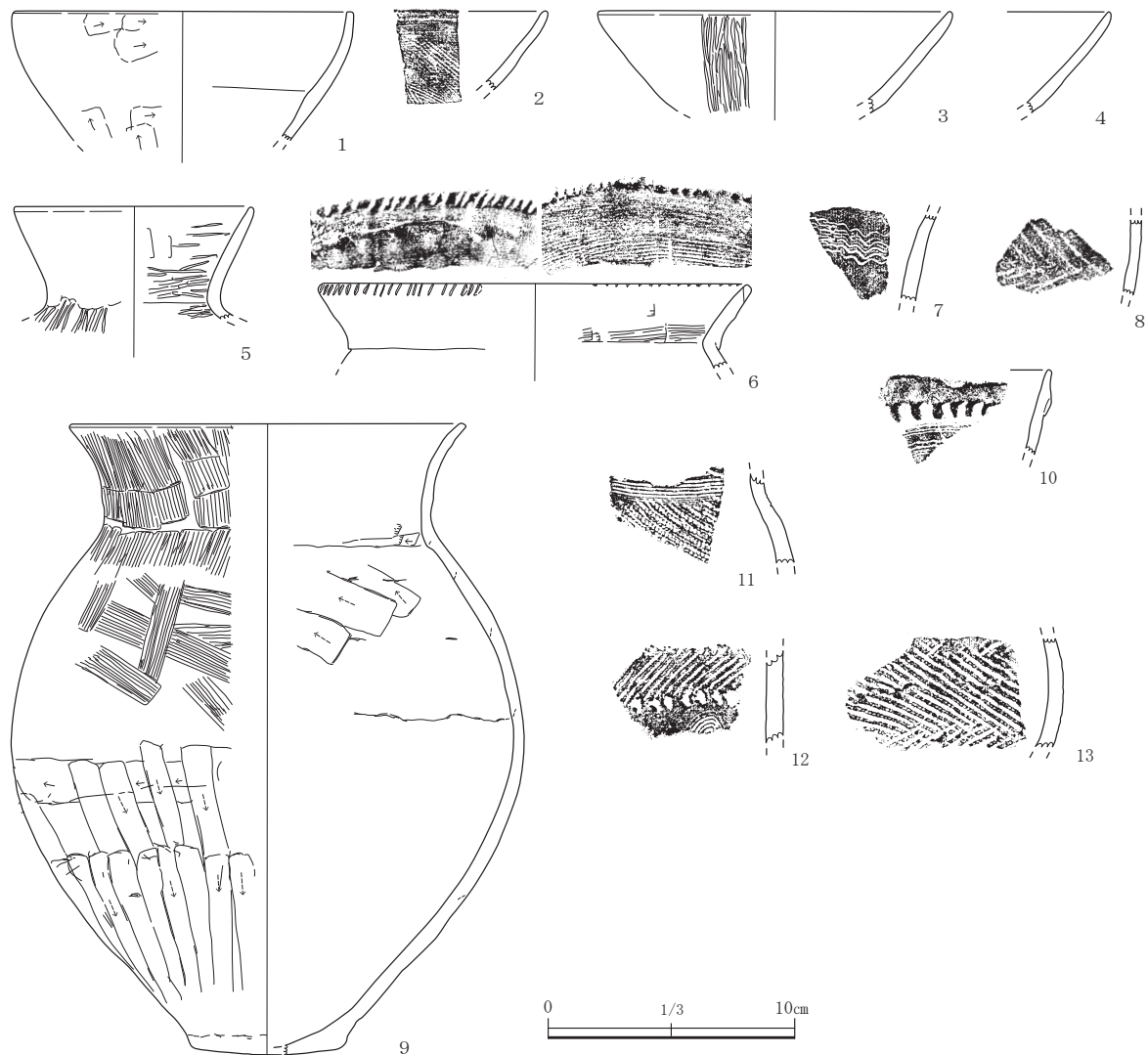
-34° 30' -Eを示す。壁は現存高 20～35 cm。北西辺，南西辺はやや外傾し，他は直立ぎみに立ち上がる。壁下に壁溝は確認されなかった。床面はローム層を利用し，ほぼ平坦で堅く締まっていた（1点鎖線内）。竪穴内より17基の小穴を確認したが，大部分が攪乱で支柱穴は確認されなかった。南隅のP1と東隅のP2は所謂貯蔵穴と考えられる。P1は80×90 cmの不整楕円形，深さ20 cm，覆土中より土師器片が5点出土した。P2は43×45 cmの円形，深さ21 cm。覆土中より土師器片が16点出土した。炉は隣接して2箇所認められた。竪穴の中央やや東寄りのものは東半部が攪乱に切られており，南北長約50 cm，現存東西長約30 cmの範囲に径5～20 cm程の焼面が点在した（第5図下）。床面が直接被熱した状態で，濃いアミ掛け部分の焼けが強い。やや西寄りのものは南北長約64 cm，東西長約45 cmの不整楕円形で，中央での深さ8 cm程の摺鉢状の凹みに焼土が充満する状況のものであった。焼土下位より土師器片が出土している。覆土は第5図に示した如く，試掘トレンチとの重複により大部分が失われていたが，5層に分層され下位はローム粒・塊を多く含み，人為的埋没，上位は自然埋没と推察される。

遺物 出土遺物は縄文土器，弥生土器，土師器，須恵器など総計129点で，内訳は第8表を参照されたい。これらのうち，弥生土器6点，土師器7点の計13点（第6図）と，縄文土器1点（第12図）を掲載した。これらの遺物から本跡の帰属時期は古墳時代前期初頭と考えられる。

第3表 SI-1 出土遺物観察表

() 推定値 [] 現存値

番号	種別 器種	大きさ (cm) 口径・高さ・底径	整形・手法等	胎土・焼成・色調	出土位置・備考
SI1-1	土師器 壺	口径 (13.8) 器高 [4.3] 底径 —	外面横・斜めのヘラ削り後ナデ，内面ヘラナデ後ミガキ，内外面赤色塗彩	胎土：石英，長石，細砂粒多 焼成：普通 色調：内・外 赤色塗彩で赤褐色 (2.5YR4/8)	No.2, 炉掘方，覆土3区
SI1-2	土師器 壺	口径 — 器高 [3.3] 底径 —	口辺外面ハケ目後上位横ナデ仕上げ・同内面横にミガキ	胎土：白色砂粒，石英 焼成：良好 色調：内・外 明赤褐色 (5YR5/8)	No.5
SI1-3	土師器 高坏か	口径 (14.4) 器高 [4.2] 底径 —	口辺部外面縦にヘラミガキ，内面不詳	胎土：白色砂粒，長石，石英 焼成：普通 色調：内・外 橙色 (5Y6/8)	No.1 4と同一個体か，二次被熱で器面荒れる
SI1-4	土師器 高坏か	口径 — 器高 [4.2] 底径 —	口辺部外面縦にヘラミガキ，内面不詳	胎土：白色砂粒，長石，石英 焼成：普通 色調：内・外 明赤褐色 (5YR5/8)・黒褐色 (5YR3/1)	炉覆土 3と同一個体か，二次被熱で器面荒れる
SI1-5	土師器 壺	口径 (9.6) 器高 [4.6] 底径 —	口辺部内面横ヘラナデ後横ミガキ・同外面ハケ目後横にミガキ	胎土：石英，チャート，白色砂粒，海綿骨針 焼成：普通 色調：内 明赤褐色 (2.5YR5/8)，外 橙色 (7.5YR6/6)	P1 覆土 二次被熱で器面荒れる
SI1-6	土師器か 甕	口径 (17.8) 器高 [3.3] 底径 —	口縁にキザミ目，複合口辺，口辺部外面ナデ，内面ハケ目，上位はナデ消ス	胎土：石英，チャート，赤褐色粒 焼成：普通 色調：内・外 灰白色 (10YR8/2)	覆土3区 二次被熱
SI1-7	弥生土器 壺	口径 — 器高 [3.5] 底径 —	体部外面クシ状具 (8本) による波状文	胎土：微砂粒，長石 焼成：普通 色調：内 橙色 (7.5YR6/8)，外 にぶい黄褐色 (10YR5/4)	No.4 二次被熱
SI1-8	弥生土器 壺	口径 — 器高 [3.1] 底径 —	外面羽状縄文	胎土：石英，長石 焼成：普通 色調：内 にぶい黄褐色 (10YR7/4)，外 黒褐色土 (10YR3/1)	No.3 二次被熱
SI1-9	土師器 甕	口径 (16.2) 器高 25.9 底径 6.2	口辺部内面横ナデ仕上げ・同外面縦ハケ目，体部内面横・斜めヘラナデ・同外面縦・斜めヘラナデ	胎土：石英，長石，海綿骨針，白色砂粒 焼成：普通 色調：内・外 橙色 (7.5YR7/6)・暗褐色 (10YR3/4)	No.6・7, 覆土3区 二次被熱，体部外面煤付着
SI1-10	弥生土器 壺	口径 — 器高 [3.5] 底径 —	口辺部外面・折り返しの下端にヒダ状のキザミ目，頸部外面クシ状具 (4本) による波状文	胎土：長石，チャート 焼成：普通 色調：内・外 にぶい褐色 (7.5YR5/4)	覆土3区
SI1-11	弥生土器 壺	口径 — 器高 [4.5] 底径 —	体部上位クシ状具 (7本以上) による連条文，中・下位付加条縄文を施す	胎土：石英，長石 焼成：普通 色調：内 黒褐色 (7.5YR3/1)，外 黒褐色 (10YR3/2)	覆土3区
SI1-12	弥生土器 壺	口径 — 器高 [3.8] 底径 —	上位に付加条縄文を施し，下位に原体端部による押捺を廻らす	胎土：石英，長石 焼成：普通 色調：内 灰褐色 (7.5YR4/2)，外 にぶい褐色 (7.5YR5/3)	覆土1区
SI1-13	弥生土器 壺	口径 — 器高 [4.5] 底径 —	外面羽状の付加条縄文，内面ナデ	胎土：石英，長石，チャート 焼成：普通 色調：内 橙色 (7.5YR6/6)，外 暗褐色 (10YR3/4)	覆土1区

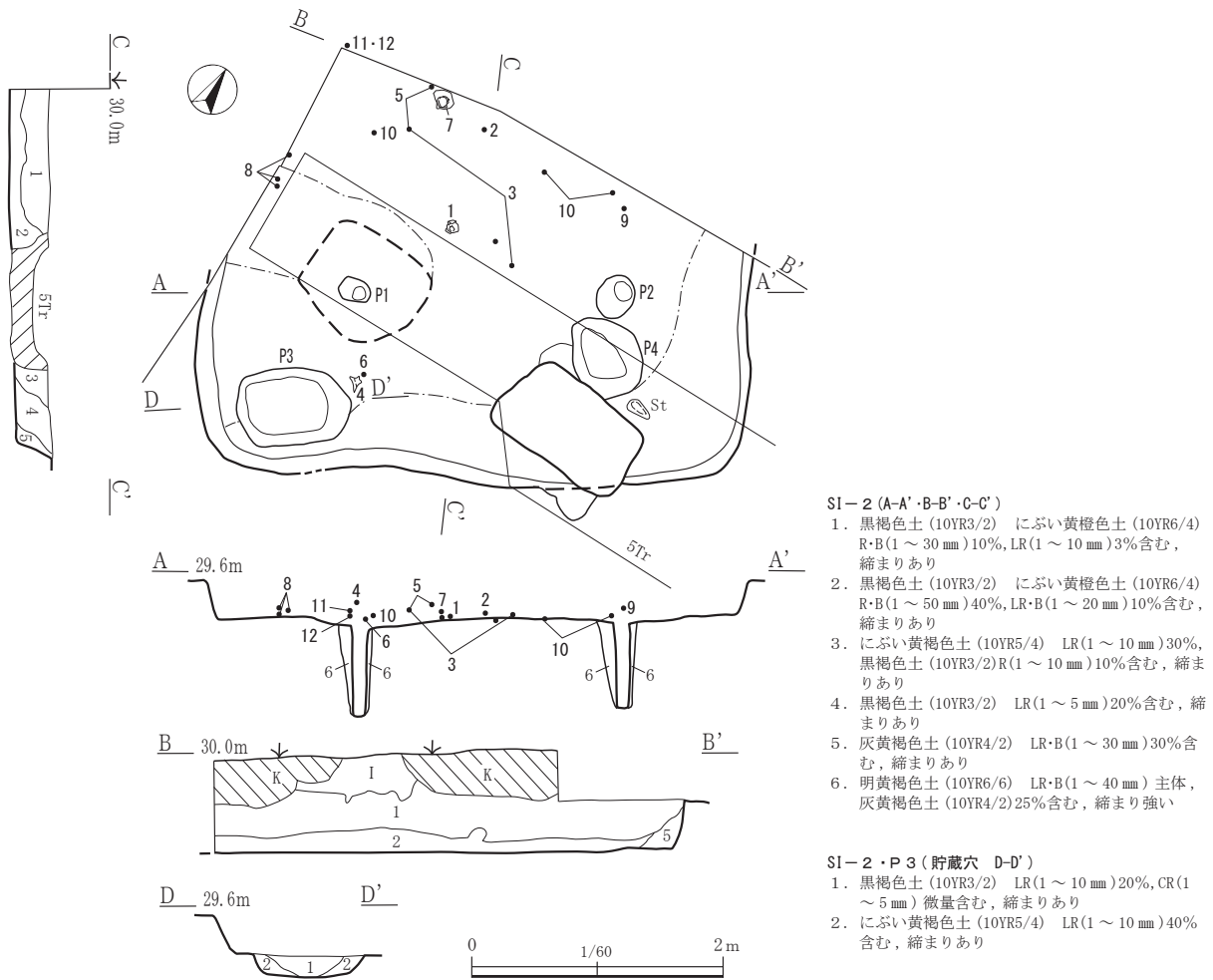


第6図 SI-1出土遺物

第2号竪穴建物跡 (SI-2) (第7・8・12図, 第4・7・8表, 写真図版2C~I・4・5)

遺構 調査区北西隅に所在し, 北半部は調査区外となる。土坑 (SK-7・8) と重複しこれらに切られていた。また, 試掘調査時の5トレンチが確認され, 底面は竪穴の床面まで達しており, P1付近にあった後世の掘り込みは痕跡のみの確認となった。

平面形・規模は前記の状況により明確にし難いが, 北東・南西長約4.35 m, 現存北西・南東長約3.33 m, 本来は一辺4.35 m程の方形と推定される。南東辺より推定される主軸方位はN-31°-Wを示す。壁は現存高25~30 cm。ほぼ直立する。壁下に壁溝は確認されなかった。床面はほぼ平坦で, 堅く締まっていた。なお, 北東~南東部では壁より内側へ50 cmまでの床面が内側より若干高くなっていた。小穴は4基 (P1~4) 確認し, P1・2が支柱穴, P3は所謂貯蔵穴と考えられ, 本来は4本柱と推定される。P1・2は開口部の径が25~35 cm, 深さ71~75 cmであった。P3は60×90 cmの楕円形で, 深さ20 cm程である。炉跡は確認されず, 調査区外に所在すると思われる。覆土は5層に分けられ, 自然埋没と考えられる。



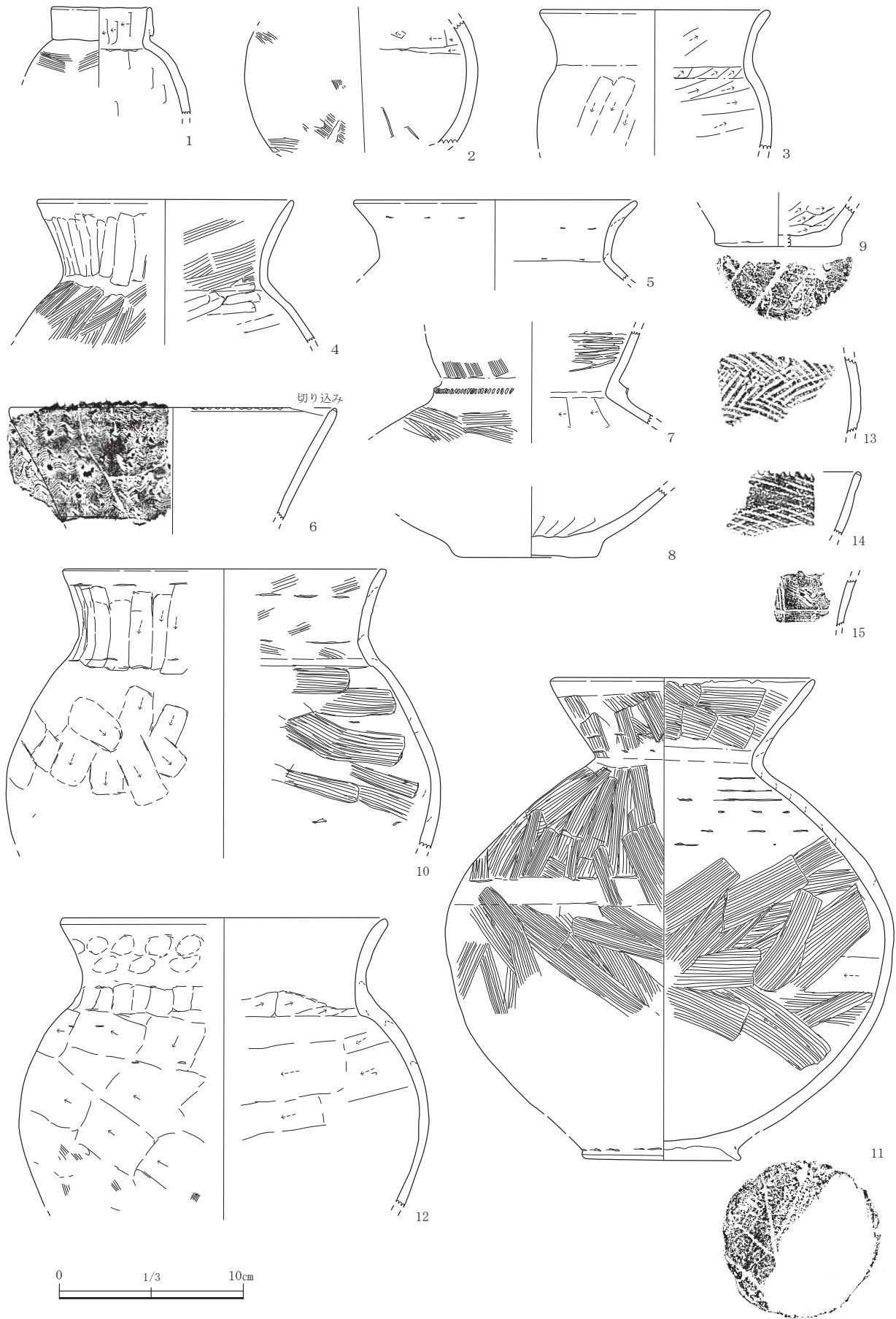
第7図 SI-2

遺物 出土遺物は縄文土器, 弥生土器, 土師器, 須恵器など総計147点で, 内訳は第8表を参照されたい。これらのうち, 弥生土器3点, 土師器12点の計15点(第8図)と, 縄文土器1点(第12図)を掲載した。本跡では弥生時代終末期の土器と土師器が伴出しており, 帰属時期は古墳時代前期初頭と考えられる。(水野)

第4表 SI-2 出土遺物観察表

() 推定値 [] 現存値

番号	種別 器種	大きさ(cm) 口径・高さ・底径	整形・手法等	胎土・焼成・色調	出土位置・備考
SI2-1	土師器 小型壺	口径 5.4 器高 [5.8] 底径 —	複合口辺, 口辺部内面にヘラナデ, 体部内面ヘラナデ・同外面横にハケ目	胎土: 白色砂粒, 長石, 石英, 海綿骨針 焼成: 良好 色調: 内・外 明赤褐色(2.5YR5/8)	No.11
SI2-2	土師器 壺	口径 — 器高 [6.6] 底径 —	体部外面ハケ目後粗いナデ・同内面ヘラナデ後ナデ, 上・下位の接合部ヘラナデを施す	胎土: 白色砂粒・赤褐色粒, 海綿骨針, 長石 焼成: 普通 色調: 内 明赤褐色(5YR5/6), 外 橙色(5YR6/8)	No.10, 覆土1区
SI2-3	土師器 甕	口径 (12.4) 器高 [7.6] 底径 —	口辺部内面・外面上位横ナデ仕上げ, 体部外面斜め・同内面横にナデ	胎土: 石英, 長石, 白色砂粒 焼成: 普通 色調: 内 にぶい褐色(7.5YR5/3), 外 橙色(7.5YR7/6)	No.6・13, 覆土2区 二次被熱
SI2-4	土師器 甕	口径 (13.8) 器高 [7.8] 底径 —	口辺部外面縦ヘラナデ, 体部外面斜めハケ目, 内面横にヘラナデ	胎土: 白色砂粒・赤褐色粒, 海綿骨針, 石英, チャート 焼成: 普通 色調: 内・外 橙色(5YR6/8), 一部黄褐色(7.5YR7/8)	No.1 二次被熱
SI2-5	土師器 甕	口径 (15.4) 器高 [4.5] 底径 —	口辺部内・外面横ナデ仕上げ	胎土: 白色砂粒, 海綿骨針, チャート 焼成: 普通 色調: 内・外 にぶい黄褐色(10YR7/4), 一部 橙色(5YR7/8)	No.6・7 破損後二次被熱, 一部 煤付着
SI2-6	弥生土器 壺	口径 (17.8) 器高 [6.2] 底径 —	口縁にキザミ目, 口辺部外面クシ状具(5本)による波状文(6段), 頸部との境に沈線を廻らす	胎土: 白色砂粒, 石英, 長石, 海綿骨針 焼成: 普通 色調: 内・外 橙色(5YR6/8)・(5YR7/6)	No.17, P3 覆土



第8図 SI-2出土遺物

() 推定値 [] 現存値

番号	種別 器種	大きさ (cm)		整形・手法等	胎土・焼成・色調	出土位置・備考
		口径	高さ・底径			
SI2-7	土師器 壺	口径 器高 底径	— [5.1] —	口辺部内・外面ハケ目後ミガキ, 体部外面ハケ目後ミガキ・同内面横にヘラナデ, 頸部凸帯キザミ目, 外面赤色塗彩	胎土: 石英, 長石, 白色砂粒・赤褐色粒 焼成: 良好 色調: 内 橙色 (5YR6/6), 一部褐灰色 (10YR4/1)・外 明赤褐色 (2.5YR5/8)	No. 8
SI2-8	土師器 壺	口径 器高 底径	— [3.5] 7.6	体部外面ミガキ後赤色塗彩, 体・底部内面ヘラナデ後ミガキ, 底部外面中央部凹む	胎土: 白色砂粒・赤褐色粒, 石英 焼成: 普通 色調: 内・外 明赤褐色 (2.5YR5/8), 一部橙色 (7.5YR6/8)	No. 2・3・4, 覆土1区 二次被熱
SI2-9	土師器 甕	口径 器高 底径	— [2.4] (15.4)	内面指ナデ, 底部外面木葉痕	胎土: 白色砂粒, 石英, 長石, 海綿骨針 焼成: 普通 色調: 内 橙色 (7.5YR6/6), 外 灰黄褐色 (10YR4/2)	No. 16 二次被熱
SI2-10	土師器 甕	口径 器高 底径	(16.2) [15.4] —	口辺部内面ハケ目後横ナデ仕上げ・同外面縦にヘラナデ, 上部横ナデ仕上げ, 体部内面横ハケ目後ナデ・同外面斜めヘラナデ, 内面に輪積み痕目立つ	胎土: 石英, 長石, 海綿骨針 焼成: 普通 色調: 内 橙色 (7.5YR7/6), 外 黄橙色 (10YR8/6)	No. 5・14・15, 覆土1区 二次被熱, 器面荒れる
SI2-11	土師器 壺	口径 器高 底径	14.2 26.5 —	口辺部内面横にヘラナデ, 体部内面横・斜め, 口辺部外面縦・体部外面縦・斜めハケ目後粗いミガキ, 底部外面木葉痕	胎土: 白色砂粒, 石英, 長石, 海綿骨針 焼成: 良好 色調: 内・外 浅黄橙色 (10YR8/3), 一部黒色 (10YR2/1)	No. 18A 二次被熱
SI2-12	土師器 甕	口径 器高 底径	(17.6) [15.9] —	口辺部内・外面横ナデ仕上げ, 内面下位横・外面下位縦にヘラナデ, 体部外面ヘラナデ後ナデ, 下位にハケ目のこる, 同内面横・斜めにヘラナデ	胎土: 石英, 長石, 白色砂粒, 海綿骨針 焼成: 普通 色調: 内 にぶい黄橙色 (10YR7/3), 外 黒褐色 (10YR3/1)・にぶい黄褐色 (10YR7/4)	No. 18B 二次被熱, 外面荒れ著しい
SI2-13	弥生土器 壺	口径 器高 底径	— [3.7] —	外面羽状の付加条縄文を施す, 内面ナデ仕上げ	胎土: 石英, 長石, 白色砂粒 焼成: 普通 色調: 内 にぶい褐色 (7.5YR5/4), 外 にぶい赤褐色 (5YR5/4)	覆土1区
SI2-14	弥生土器 壺	口径 器高 底径	— [3.5] —	口縁にキザミ目, 口辺外面に付加条縄文・同内面横ナデ	胎土: 石英, 白色砂粒 焼成: 良好 色調: 内・外 黒褐色 (10YR3/2), 一部にぶい黄褐色 (10YR7/3)	覆土2区
SI2-15	弥生土器 壺	口径 器高 底径	— [2.6] —	外面クシ状具 (5本) による縦横の区画内に横走る波状文を施す, 内面横にヘラナデ	胎土: 白色砂粒, 石英 焼成: 良好 色調: 内 橙色 (5YR6/8), 外 にぶい黄褐色 (10YR7/4)	覆土2区

第2節 中世

1. 概要

該期の遺構は、調査区東隅で性格不明の土坑 (SK - 5) の一部と小穴 (P - 2) の一部を確認したのみである。遺物は、SK - 5 より古瀬戸の陶器3点, P - 2 より土師質土器内耳鍋7点 (同一個体か) の他 SI - 2, 1B - 15 区からも内耳鍋の小片が出土している。

2. 土坑

第5号土坑 (SK - 5) (第9・12図, 第5・7・8表, 写真図版3G ~ J・5)

遺構 調査区南東隅に所在し, 北西隅の一部を確認したのみで, 他の大部分は調査区外にあると思われる。

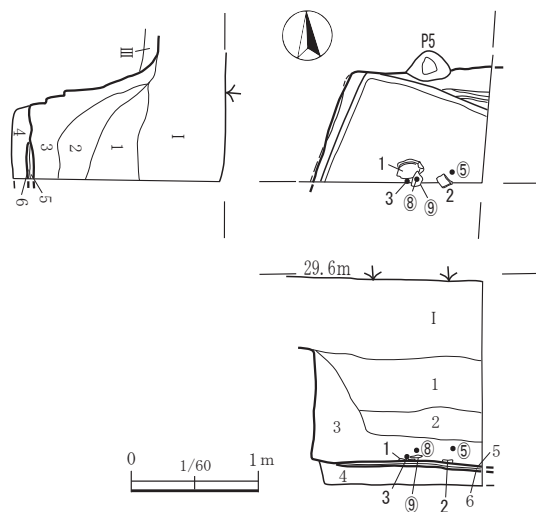
平面形・規模は, 前記の状況により明確にし難い。現存東西長約110 cm, 現存南北長約95 cmで, 本来は方形もしくは長方形の比較的大型の遺構と推察される。深さ85 ~ 105 cmで, 壁はほぼ直立する。底(床)面は, 新旧2面確認された。旧は, 底面(使用面)より約15 cm深く掘り込んだ後, ローム土で整地しその上面を利用したもので, ほぼ平坦で締まりは強い。その後, 厚さ1 ~ 1.5 cm程の黒褐色土の間層の上にローム土主体の土で厚さ1 ~ 1.5 cm程の貼床を設けていた。壁際は判然としないものの, 他は平坦で堅く締まっていて, 直上より古瀬戸の瓶子, 折縁深皿, 壺などが出土した。なお, 前述の底面下の当初の掘り込みの形状と床面より上の部分とは壁の位置に若干のずれが認められ, あるいは改修時に生じた変化かと推察される。最終時の南北軸はN - 25° - Eである。覆土は6層に分けられ, 第1 ~ 3層は廃絶後の覆土, 第5層は新しい貼床層, 第6層は間層, 第4層は古い整地層で上面が堅く締まる。

遺物 出土遺物は縄文時代の石皿，古墳時代～古代の埴輪，土師器，須恵器（第12図）の他前述の陶器（第9図）などがある。なお，本跡の帰属時期については，これら古瀬戸後Ⅱ期の陶器類から14世紀末～15世紀初めと考えられる。また，遺構の性格については部分的な確認であり明確にし難い。天井部を構成するローム土の落下が認められないことから地下式坑よりは半地下式の方形堅穴の可能性が高いが，壁溝や柱穴なども確認されておらず保留とする。

3. 小穴

第2号小穴（P-2）（第10図，第5・6・8表，写真図版3N・0・5）

遺構 調査区南東に所在し，南側は調査区外に所在する。東約0.7mにSK-5が隣接する。前記の状況から本来の規模・形状は明確にし難い。現存南北長約41cm，同東西長約47cmで，本来は南北に長い不整楕円形と推察される。壁はやや外傾し，底面が2段になっていて，深さは45～56cm。覆土は3層に分けられ，第1層は自然埋没，第2・3層はローム粒・塊を多く含み人為的埋没と考えられる。

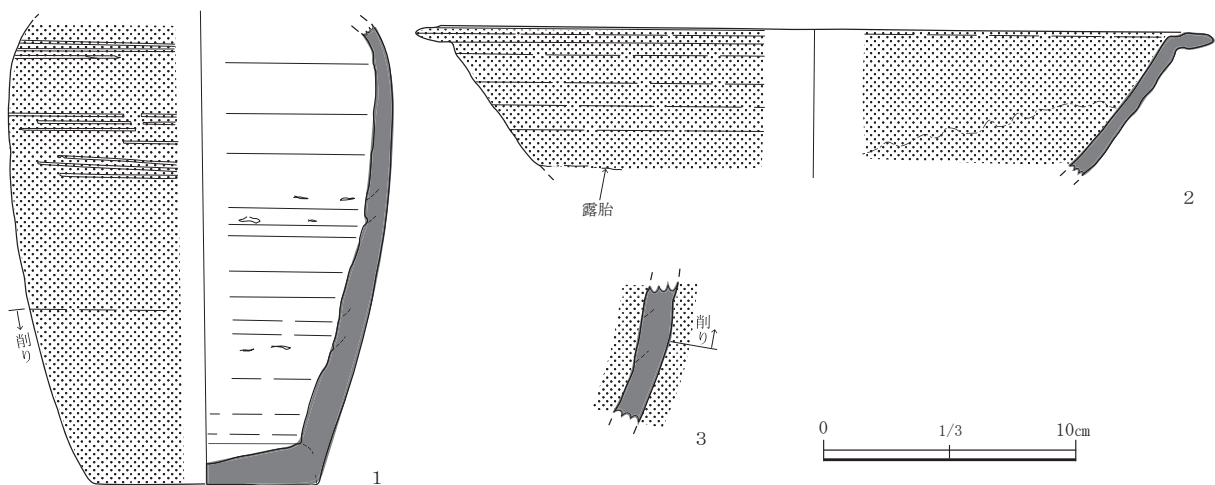


SK-5

1. 褐灰色土 (10YR4/1) LR(1～10mm)8%，遺物（埴輪，石皿，土師器）を含包，縮まりあり
2. 黒褐色土 (10YR3/2) LR(1～5mm)5%含む，縮まりあり
3. 黒褐色土 (10YR3/2) LR・B(1～50mm)25%含む，遺物（土師器，陶器，礫）を多く含む，縮まりあり
4. 明黄褐色土 (10YR6/6) LR・B(1～60mm)主体，黒褐色土 (10YR3/2)R(1～10mm)10%含む，底面整地層，縮まりあり，上面は縮まり強く床面状
5. 明黄褐色土 (10YR6/6) LR(1～10mm)主体，黒褐色土 (10YR3/2)20%含む，縮まり強い，二次底面（貼床状）
6. 黒褐色土 (10YR3/2) LR(1～5mm)15%含む，縮まりあり（間層）

○印は調査区内出土遺物（第12図）に掲載

SK-5



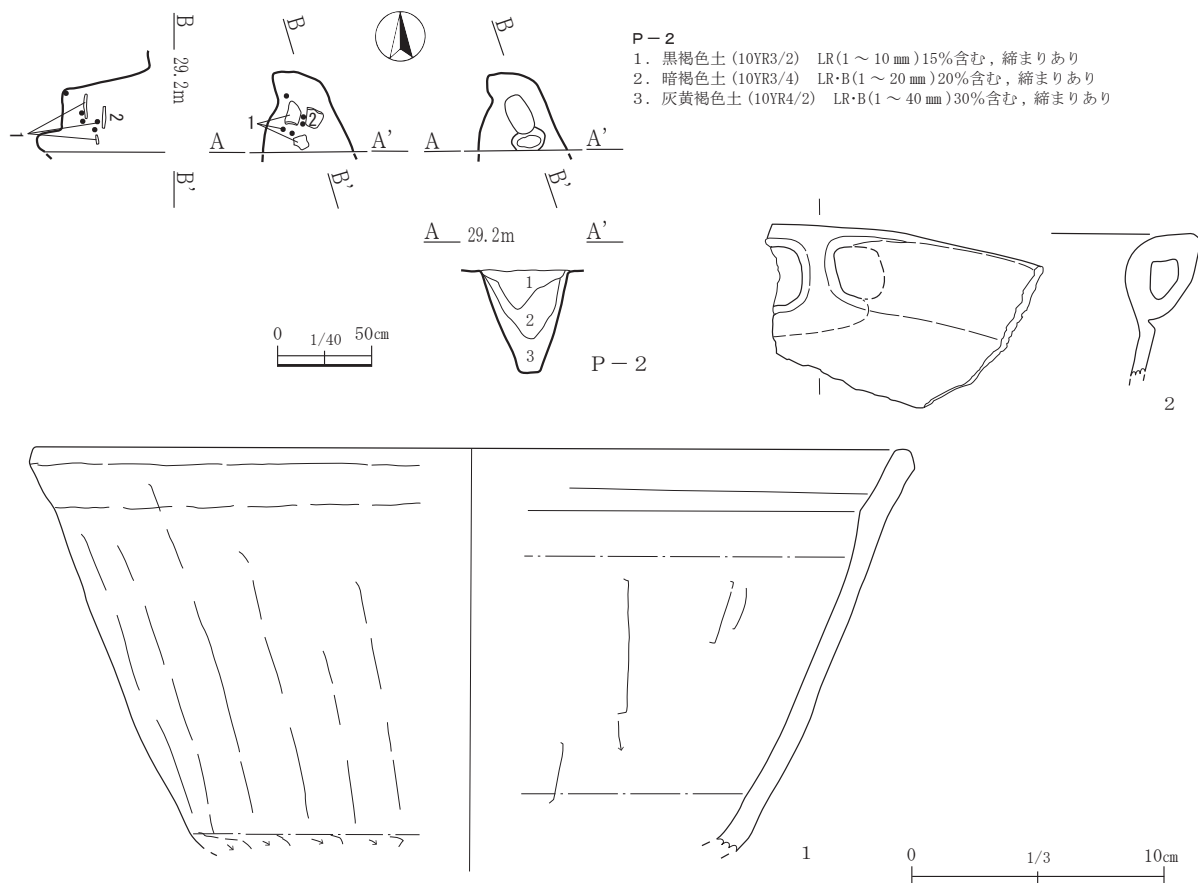
第9図 SK-5・出土遺物

遺物 第2・3層中より土師質土器内耳鍋の破片が7点、古式土師器片1点の計8点出土した。内耳鍋は全てを接合することは出来なかったが、手法・焼成などから同一個体と推察される。また、各破片毎に色調が異なることから破損後に被熱を受けたものと思われる。出土遺物から、本跡の帰属時期については14世紀後半～15世紀前葉と推察される。また、遺構の性格については部分的な確認であり、不明とする。(水野)

第5表 中世遺物観察表

() 推定値 [] 現存値

番号	種別 器種	大きさ (cm) 口径・高さ・底径	整形・手法等	胎土・焼成・色調	出土位置・備考
SK5-1	陶器 瓶子	口径 — 器高 [18.5] 底径 9.5	ロクロ整形, 体部内面に輪積み痕, 体部外面灰釉, 底部外面砂粒附着	胎土: 精良, 石英, 長石微量 焼成: 良好 色調: 釉 灰オリーブ色 (7.5Y5/3), 胎 灰白色 (10YR 8/2)	No. 6 古瀬戸後II期, 14C末～15C初
SK5-2	陶器 折縁深皿	口径 (32.0) 器高 [5.8] 底径 —	ロクロ成形, 折縁口辺, 灰釉を施すが外面下半は露胎, 内面下半は釉薄い	胎土: 精良, 石英, 長石微量 焼成: 良好 色調: 釉 オリーブ色 (5Y6/6), 胎 灰白色 (5Y7/2)	No. 2 古瀬戸後II期, 14C末～15C初
SK5-3	陶器 壺か	口径 — 器高 [5.7] 底径 —	輪積み, ロクロ整形か, 内外面灰釉, 内面に輪積み痕とロクロ目, 外面横の削り痕	胎土: 石英, 長石微量, 精良 焼成: 良好 色調: 釉 オリーブ灰色 (10Y4/2), 胎 灰白色 (2.5Y8/1)	No. 5, 割れ口に二次被熱痕, 古瀬戸後II期, 14C末～15C初
P2-1	土師質土器 内耳鍋	口径 (35.6) 器高 [16.2] 底径 —	輪積み, 内面上・下位横ナデ仕上げ, 中位横へラナデ後ナデ消ス, 外面縦へラナデ・下端へラ削り	胎土: 石英, 長石, 海綿骨針 焼成: 普通 色調: 内 黄橙色 (7.5YR7/3), 外 にぶい橙色 (7.5YR6/4)・黒褐色 (7.5YR3/1)	No. 2・3・5 2と同一個体か, 下位二次被熱著しい
P2-2	土師質土器 内耳鍋	口径 (35.6) 器高 [5.7] 底径 —	輪積み, 内面横ナデ仕上げ, 外面縦へラナデ, 耳1箇所遺存	胎土: 石英, 長石, 海綿骨針 焼成: 普通 色調: 内 黄橙色 (7.5YR7/8), 外 にぶい褐色 (7.5YR5/3)	No. 1 1と同一個体か



第10図 P-2・出土遺物

第3節 時期不明遺構

1. 概要

前述の如く、本遺跡は縄文時代より中世にわたる複合遺跡であるが、後世の土地利用の影響によって上部が削平されてしまったものや近世以降の攪乱を受けたものも多い。帰属時期を明確に出来なかった土坑8基、小穴25基については本節で報告する。

2. 土坑類

第1A号土坑 (SK - 1A) (第11図, 写真図版3A・B)

遺構 調査区中央やや北西寄りに所在する。南西はSK - 2に切られ、北東はSK - 1Bを切る。平面形・規模は、開口部が南北長約122 cm、東西長約95 cmの不整楕円形で、長軸方位はN - 30° - Wを示す。深さ12 ~ 16 cmで、壁はやや外傾し、底面はほぼ平坦であった。覆土は2層に分けられる。遺物の出土はなかった。

第1B号土坑 (SK - 1B) (第11図, 写真図版3B)

遺構 南側はSK - 1Aと重複しこれに切られていた。また、北と北西部に張り出し状の部分が認められたが、本跡との関係は判然としない。前記の状況から本来の規模・形状は明確にし難いが、北西・南東長約83 ~ 110 cm、現存北東・南西長約108 cmで、南北に長い不整楕円形であったと推定される。深さ約16 cm、壁はやや外傾し、底面はほぼ平坦であった。覆土は2層に分けられる。遺物の出土はなかった。

第2号土坑 (SK - 2) (第11図, 第8表, 写真図版3A・C)

遺構 調査区西辺中央やや北寄りに所在する。北でSK - 1Aと重複しこれを切る。平面形・規模は、南北長約102 cm、東西長約68 cmの楕円形で、長軸方位はN - 7° - Eを示す。深さ30 cmで、壁はやや外傾し、底面はほぼ平坦であった。覆土は2層に分けられる。

遺物 覆土中より弥生土器2点、土師器3点、須恵器1点の計6点が出土したが、いずれも細片で図示し得るものはなかった。

第3号土坑 (SK - 3) (第11図, 写真図版3D・E)

遺構 調査区北端中程に所在する。北約0.8 mにSK - 4、西約1.1 mにSK - 7が隣接する。平面形・規模は、南北長約88 cm、東西長約133 cmの長方形で、長軸方位はN - 89° - Eを示す。深さ40 cmで、壁はやや外傾し、底面はほぼ平坦であった。覆土は3層に分けられ、人為的埋没と考えられる。遺物の出土はなかった。

第4号土坑 (SK - 4) (第11図, 第8表, 写真図版3F)

遺構 調査区北端中程に位置し、北側の大部分は地区外に所在する。平面形・規模は、前記の状況から明確にし難いが、現存南北長約31 cm、東西長約90 cmである。南北に長軸をもつ長方形の土坑と推察される。深さ30 ~ 35 cm、壁は直立ぎみに立ち上がり、底面はほぼ平坦であった。覆土は3層に分けられ、下位が人為的埋没の後、自然埋没と考えられる。

遺物 覆土中より弥生土器2点、古墳時代の土師器1点計3点の細片が出土した。

第6号土坑 (SK - 6A) (第11図, 写真図版3K・L)

遺構 調査区北西部に所在する。北でSK - 6Bと重複し、これに切られていると思われるが、判然としない。平面形・規模は、北東・南西長約188 cm、北西・南東長70 cmの不整

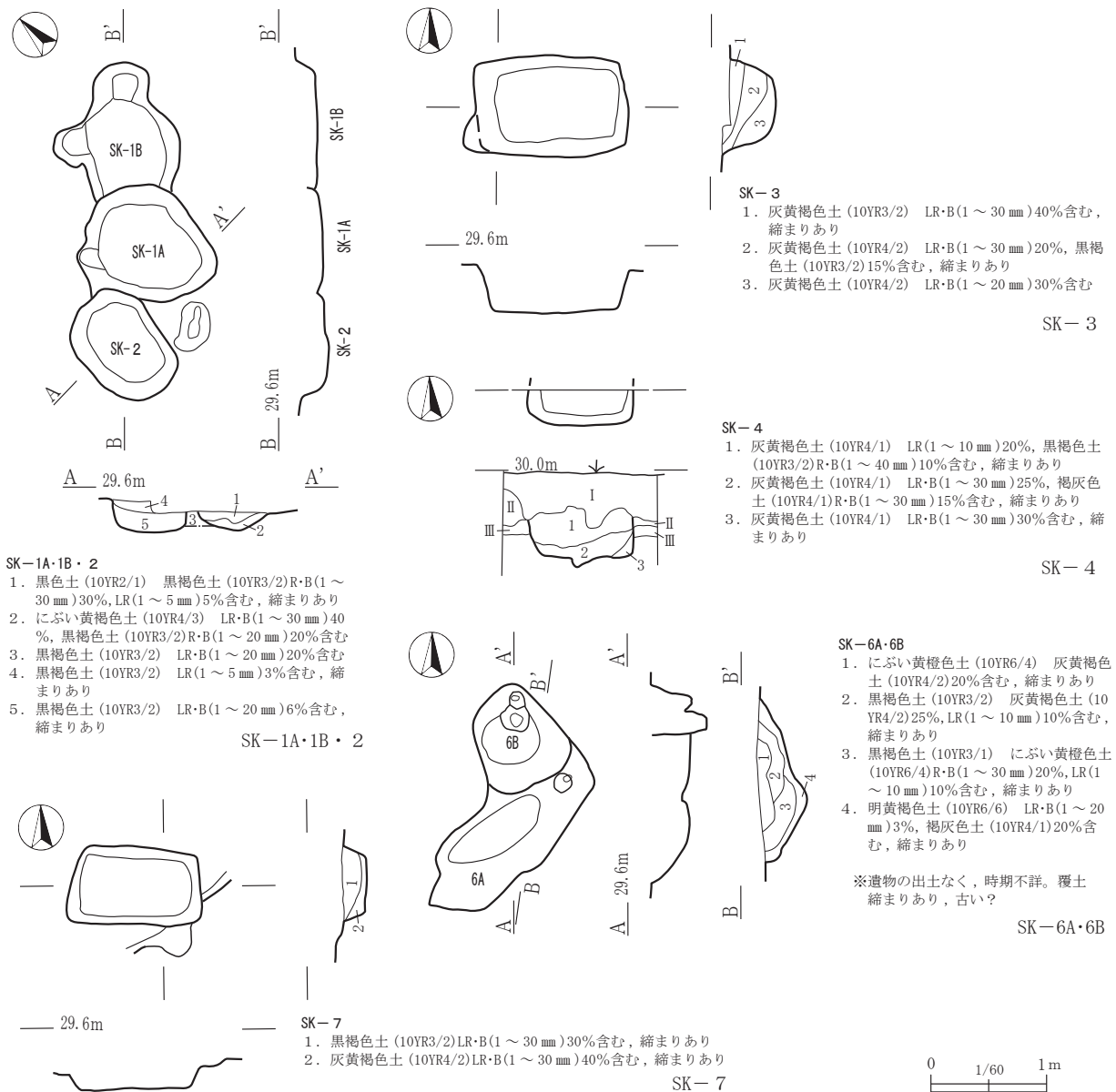
楕円形で、長軸方位はN-42°-Eを示す。深さ25~36cmで、壁は北西が直立ぎみに立ち上がり、他は大きく外傾する。底面は南から北東に向かって下降し、北東部に径18cm、深さ30cm程の後世の小穴が認められた。覆土は4層に分けられる、遺物の出土はなかった。

第6B号土坑 (SK-6B) (第11図, 写真図版3L)

遺構 調査区北西部に所在する。南がSK-6Aと重複し、これを切っていると思われるが、判然としない。平面形・規模は、南北長96cm、東西長88cmの不整楕円形である。深さ27~34cmで、壁は外傾し、底面は東から西に向かって下降する。北端に径15~25cm、深さ30~40cm程の後世の小穴2基を確認した。覆土は3層に分けられ、遺物の出土はない。

第7号土坑 (SK-7) (第11図, 写真図版3M)

遺構 調査区北西部に所在し、SI-2内に掘り込まれていた。平面形・規模は、東西長約112cm、南北長約72cmの長方形で、長軸方位はN-86°-Wを示す。深さ約25cmで、



第11図 SK-1A~4・6A~7

壁はやや外傾し、底面はほぼ平坦であった。覆土は2層に分けられ、人為的埋没と考えられる。遺物の出土はなかった。

以上8基の土坑は前述の通り帰属時期を明確にし得なかったが、平面形や覆土から平面が長方形・楕円形（SK-2～4・7）と不整楕円形（SK-1A・1B・6A・6B）の2群に大別される。前者は覆土中に古代の土師器・須恵器片が混入するが、覆土の状態を加味すると、近世以降の遺構と考えられる。また、後者は、覆土の締まり具合などからは縄文時代頃のものと考えられ、掘削状態や埋没状況を考慮すると、風倒木痕等の可能性も否定出来ない。

3. 小穴類（第6・8表）

調査区内で小穴を計26基（P-1～25B）確認し、うち1基（P-2）は前節で記した。他の小穴にも弥生土器や土師器の小片が出土したものもあるが、遺物の遺存状態などから、いずれとも決し難く本節で報告することとした。それぞれの計測値等は第6表に示した通りである。規模・形状・配置などから建物跡等を想定することは出来なかった。（水野）

第6表 小穴計測表

[] 現存値, 単位 cm

No.	地区	長径×短径×深さ	平面形	備考	No.	地区	長径×短径×深さ	平面形	備考
P-1	1B-20	39×35×28	円		P-15	2B-12	39×31×46	楕円	
2	1B-15	[45]×45×45～60	楕円か	内耳鍋7, 土師器壺1	16	2B-6・11	54×50×50	円	弥生土器壺2, 土師器甕1
3	1B-15	72×56×20	楕円	土師器坏1, 甕3	17	2B-11	69×50×33	楕円	
4	2B-16	28×27×37	円	土師器壺か1	18	2B-3	39×37×34	円	
5	1B-20	35×26×30	楕円		19	2B-3	34×24×46	楕円	
6	2B-16	37×23×39	楕円		20	2B-3	17×16×36	円	
7	2B-16・17	30×21×25	楕円		21	2B-3	30×28×48	円	
8	2B-17	25×22×35	円	土師器坏か1	22	2B-3	26×24×53.5	円	
9	2B-17	36×25×39.5	楕円		23	2A-23, 2B-3	45×33×55	楕円	
10	2B-18・23	29×26×31.5	円		24	2A-23	42×38×40	円	弥生土器壺1, 土師器坏1, 甕1
11	2B-19・24	37×30×53	楕円		25A	2B-12	55×43×48	楕円	
12	2B-9	38×31×58	楕円		25B	2B-12	27×22×45	楕円	土師器坏1, 甕1
13	2B-10	24×23×18	円	弥生土器壺1					
14	2B-7	35×27×21	楕円						

第4節 調査区内出土遺物（第12図、第7・8表、写真図版5）

1. 概要

調査区内より縄文時代中期から中世にわたる遺物の出土があった。これらの中で遺構外出土のもの、後世の遺構より出土のもののうち、本遺跡における土地利用の変遷を考える上で参考となると思われる資料を掲載した。

2. 遺物

縄文時代 中期後葉の深鉢形土器①・②, 後期前葉の深鉢形土器③, 石器石皿④

古墳時代 土師器埴⑤, 円筒埴輪⑥

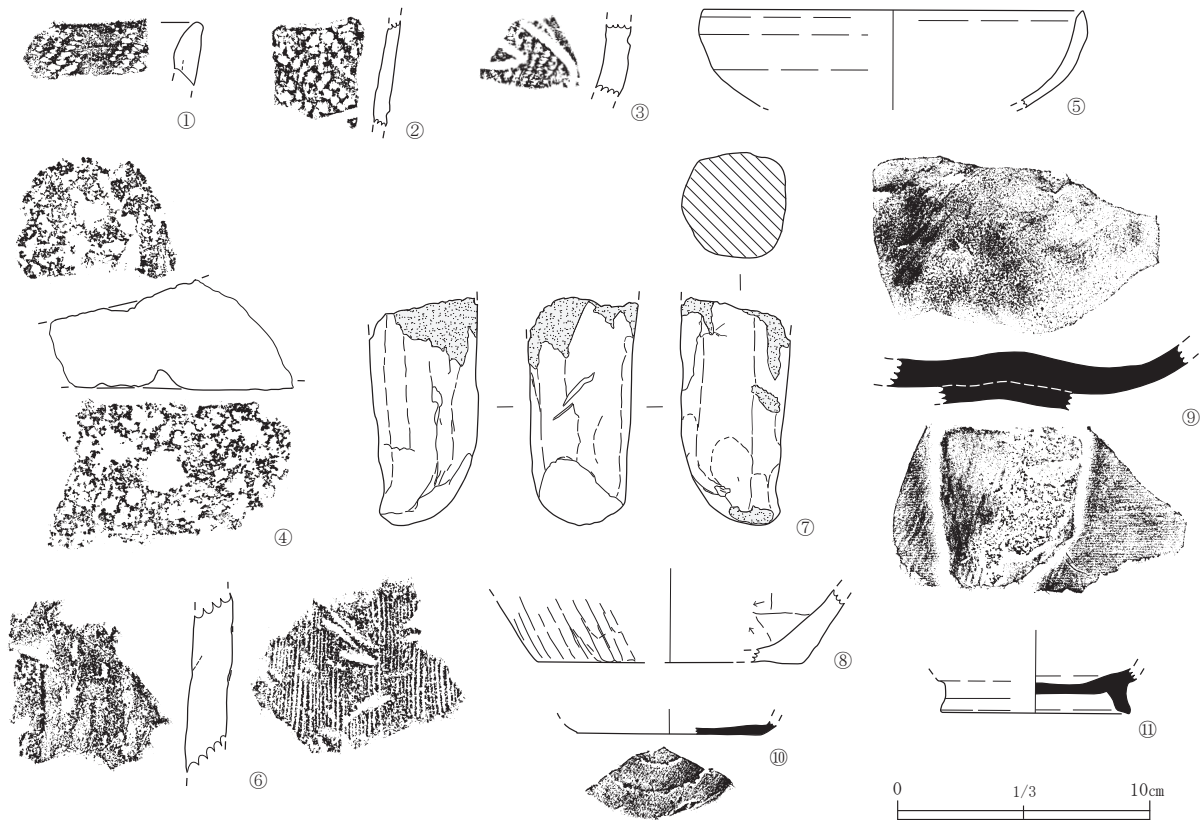
奈良・平安時代 不明土製品⑦, 土師器甕⑧, 須恵器甕⑨・坏⑩・高台坏⑪。なお、⑦の不明土製品は古墳時代の可能性も否めない。

以上の如く、縄文時代中期後葉から中世にわたる集落の存在を示すとともに、⑥の円筒埴輪の存在から近隣に埴輪が樹立された後期古墳の存在が推察される。（水野）

第7表 調査区内出土遺物観察表

() 推定値 [] 現存値

番号	種別 器種	大きさ (cm)		整形・手法等	胎土・焼成・色調	出土位置・備考
		口径	高さ・底径			
①	縄文土器 深鉢	—	[2.5] —	口辺外面縄文, 内面にミガキ	胎土: 白色砂粒, 雲母細片 焼成: 普通 色調: 内・外 浅黄色 (2.5Y7/4)	SI2- 覆土1区
②	縄文土器 深鉢	—	[4.2] —	縄文を地文, 沈線による区画文	胎土: 白色砂粒, 石英 焼成: 普通 色調: 内・外 浅黄色 (2.5Y7/4)	2B-15 内面器面荒れる
③	縄文土器 深鉢	—	[2.8] —	縄文を地文とし, 沈線による区画内すり消す, 内面にミガキ	胎土: 石英, 長石, チャート粗粒 焼成: 普通 色調: 内・外 橙色 (5YR6/8)・(7.5YR7/6)	SI1- 覆土3区
④	石器 石皿	—	—	上面中央に向かって凹む, 下面平らで凹2箇所	胎土: 多孔質安山岩製 焼成: — 色調: にぶい黄橙色 (10YR7/2)	SK5- 覆土1層
⑤	土師器 碗	(15.1) 口径	[3.9] 器高	口辺部内外面横ナデ仕上げ, 体部外面指頭圧痕後粗いミガキ・同内面ミガキ, 底部外面へら削り後粗いミガキ	胎土: 石英, 長石, 海綿骨針 焼成: 普通 色調: 内・外 橙色 (5YR6/8)	SK5- No.1 二次被熱で器面やや荒れる
⑥	埴輪 円筒	—	[7.2] 器高	外面に縦ハケ目, 内面へらナデ, 輪積み痕を認める	胎土: 石英, 長石, 赤褐色粒 焼成: 普通 色調: 内・外 橙色 (7.5YR6/6)	SK5- 覆土1層
⑦	土師器 不明	[4.3] 幅	[9.2] 長さ	手づくね, 指ナデ, 中実	胎土: 石英, 長石, チャート, 白色砂粒 焼成: 良好 色調: 浅黄橙色 (10YR8/4)・(7.5YR8/4)	2B-17 脚部か
⑧	土師器 甕	—	[3.0] 器高	体部外面棒状具によるナデ・同内面横へらナデ, 底部外面木葉痕	胎土: 白色砂粒, 長石, 石英, 雲母細粒 焼成: 普通 色調: 内 灰褐色 (5YR5/4), 外 橙色 (7.5YR6/6)	SK5- No.3
⑨	須恵器 甕	—	—	体・底部外面平行叩き目文, 焼台の甕の体部片付着	胎土: 長石, 角閃石 焼成: 良好 色調: 内・外 にぶい黄橙色 (10YR7/2)	SK5- No.4 木葉下窯産
⑩	須恵器 坏	—	(7.5) 器高	ロクロ整形, 底部へら起こし	胎土: 長石, 海綿骨針 焼成: 良好 色調: 内・外 灰色 (7.5Y5/1)	2B-8 木葉下窯産
⑪	須恵器 高台坏	—	[1.8] 器高	ロクロ整形, 底部外面へら削り後付高台	胎土: 長石, チャート 焼成: 普通 色調: 内・外 灰褐色 (7.5YR5/4)	2B-15 木葉下窯産



第12図 調査区内出土遺物

第8表 出土遺物集計表

出土地点	縄文土器				弥生土器										土師器						須恵器						中世遺物						総計	備考						
	中期		後期		加普利E		加普利B		縄文/縹系		縹文/縹系		後期後葉		櫛+縄/縹		古		古代		不明		古代		陶器		土師質土器		その他											
	破片	小計	破片	小計	破片	小計	破片	小計	破片	小計	破片	小計	破片	小計	破片	小計	破片	小計	破片	小計	破片	小計	破片	小計	破片	小計	破片	小計	破片	小計	破片	小計			破片	小計				
SI-1	No.上げ	0	0	1	1	14	14	0	0	1	1	4	4	3	3	69	69	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	8						
	覆土中	0	1	1	14	14	4	4	3	3	69	69	0	3	3	69	69	0	3	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	95						
	P1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4							
	P2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	18	18	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	18							
	炉跡	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4							
小計	0	0	0	1	15	15	5	5	3	3	100	101	0	3	101	101	0	3	3	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	129								
SI-2	No.上げ	0	0	0	0	8	8	2	2	0	0	2	2	16	16	3	19	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	21							
	覆土中	1	1	0	8	8	2	2	0	0	96	96	1	1	96	96	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	111							
	P1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	3	0	0	3	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3								
	P2	0	0	0	1	1	1	1	0	0	2	2	2	2	2	2	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3							
	P3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	7	7	7	7	7	7	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	9							
小計	1	0	1	0	9	9	4	4	2	2	124	127	1	1	124	127	1	1	1	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	147								
SK-2	覆土中	0	0	0	1	1	1	1	0	0	1	1	1	0	1	1	1	0	1	1	2	2	1	1	0	0	0	0	0	0	0	6								
SK-4	覆土中	0	0	0	2	2	2	2	0	0	1	1	1	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3								
SK-5	No.上げ	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	1	0	1	1	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6								
P-2	覆土中	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	1	0	1	1	0	0	0	0	2	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	8								
P-3	覆土中	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	3	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4								
P-4	覆土中	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1								
P-8	覆土中	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	1	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1								
P-13	覆土中	0	0	0	1	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1								
P-16	覆土中	0	0	0	2	2	2	2	0	0	1	1	1	0	1	1	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3								
P-24	覆土中	0	0	0	1	1	1	1	0	0	1	1	1	0	1	1	0	0	0	0	2	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3								
P-25B	覆土中	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	1	0	1	1	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2								
1B-15	表土中	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1								
1B-20	表土中	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	2								
2A-24	表土中	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	1	0	1	1	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2								
2B-1	表土中	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	1	0	1	1	0	0	0	0	2	2	2	2	0	0	0	0	0	0	0	5								
2B-8	表土中	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1								
2B-10	表土中	0	0	0	2	2	2	2	1	1	1	1	1	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4								
2B-15	表土中	1	1	0	4	4	4	4	0	14	14	14	14	0	14	14	0	0	0	5	5	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	25								
2B-17	表土中	0	0	0	1	1	1	1	0	1	1	1	1	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	3	不明土製品							
2B-20	表土中	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	1	0	0	0	0	0	0	2									
3A-21	表土中	0	0	0	2	2	2	2	0	3	3	3	3	0	3	3	0	0	0	1	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	6									
総計	2	0	2	1	0	1	40	0	40	11	0	11	0	5	251	4	255	5	0	5	11	0	11	19	0	19	7	0	7	2	1	3	9	0	9	3	0	3	371	

第4章 総括

今次調査区（第6地点第3次）は調査面積が僅かに142㎡で、第1地点の約3,500㎡に比べて著しく狭少であり、第2地点以降の既往の調査区も第2章第3節に記した如く、個人住宅の建築等に伴う小規模なものである。

今次調査では、古墳時代前期の竪穴建物跡2軒、中世の土坑・小穴各1基の他は、時期不明の土坑8基、小穴25基が確認されたに過ぎない。また、遺物は縄文時代中・後期の土器と石皿片、弥生時代後期後～末葉の十王台式の土器片、古墳時代前・後期の土師器、円筒埴輪片、奈良・平安時代の土師器・須恵器片、中世の国産陶器（古瀬戸）、土師質土器片（内耳鍋）などが出土した。

第1節 土地利用の変遷の概略

旧石器時代 今次調査区及び既往の調査区を含め、本遺跡では該期の遺構・遺物とも確認されていない。

縄文時代 今次調査区では明確な遺構は確認されず、中期後葉～後期前葉の土器片が数点と石皿の細片1点が後世の遺構の覆土から出土した。なお、遺物の出土はないものの、覆土の状態からSK-1A・1B・6A・6Bが該期の可能性をもつが、覆土や壁・底面の状態から風倒木などの自然の営力による可能性も全くは否定出来ない。

既往の調査区（第1地点）では、中期の竪穴遺構が1基確認され、早期沈線文系・後期安行式土器片が出土した程度であり、本遺跡における該期の土地利用は散発的なものであったと推察される。

弥生時代 今次調査区では、後期後葉の十王台式土器が後世の遺構の覆土などから出土したものの、遺構を明確にすることは出来なかった。既往の調査区（第1地点）では該期の竪穴建物跡が10軒と竪穴状遺構が1基確認されている。当地区は既存建物の建築と解体、永年の耕作、古墳時代以降～中・近世にわたる土地利用に伴う影響によって遺構が消失した可能性が高く、散見される小穴類がその名残かもしれない。

なお、鈴木素行氏による十王台式土器の細別（鈴木 2010）によれば、最古式の1期に「薬王院東式」として第1地点第39号住居址（竪穴建物跡）出土の広口壺型土器が例示されている。また、2期以降は久慈川流域以北と那珂川流域以南ではやや異なる変遷を示すが、那珂川以南の集落には久慈川以北の土器が持ち込まれるようである。さらに、栃木県宇都宮市二軒屋遺跡を標式遺跡とする二軒屋式系の土器も一定量認められる。

この時期の集落跡は、東隣りの大鋸町遺跡、西隣りの東組遺跡、北隣りの水戸南高校遺跡、北西のお下屋敷遺跡等、近隣の各遺跡に見られる。そこで、「薬王院東→お下屋敷→大鋸町」というような遺跡間における集落の移動・変遷が想定された（色川 2008）。しかし、同一遺跡内における調査地点の増加に伴う資料の蓄積によっては各遺跡内における移動・変遷を考慮する必要が生じると思われる。例えば、前述の如く本遺跡第1地点では1期の標式となる第39号住居址を初め古式の様相を示す一群が確認され、今次調査区でも後世の竪穴建物跡（SI-1）の覆土などから出土している。しかし、かつて「大鋸町式」の名称が提唱されたこともある最新の5期の土器が古墳時代前期の竪穴建物跡（SI-2）

より土師器と共伴しており，調査事例の増加によってこの間の空白時期（2～4期）が埋まる可能性も否定出来ないであろう。

古墳時代 今次調査区では前期の竪穴建物跡2軒を確認した。SI-1は全体が調査区内に所在したものの，既存建物の解体等の影響によって遺存状態が不良であった。西・北辺と南辺の一部は遺存したが，東辺と南辺の東側は推測による部分が主である。平面形・規模は4×4.2mのほぼ方形で，竪穴の中程に新・旧2箇所の手跡を確認した。壁溝や支柱穴は確認出来なかった。平面形が方形を示すものの，未だ手跡を竪穴の中央に設けており，所謂「枕石・手石」は認められなかった。南東隅に「貯蔵穴」が設けられていた。遺物は土師器小片が多いものの，南西隅の床面より3分の2程が遺存する甕形土器が出土した。

SI-2は南半部は調査し得たが，北側は調査区外に延び，本来の規模・形状は明確にし難い。北東・南西長4.35m，現存の北西・南東長3.33mで，支柱穴と壁の位置関係から北西・南東にやや長い長方形かと推定される。2本の支柱穴と南隅に所謂「貯蔵穴」を確認し，手跡は調査区外に所在する。出土遺物は土師器を主体とするも，少量の弥生土器片が共伴した。十王台式の5期に位置づけられる広口壺形土器（第8図6・14・15）で，器形・施文等は十王台式を踏襲するも，胎土や内面の整形手法は土師器の技術によるものである（注1）。SI-2からSI-1への変遷を想定する。

今次調査区では，中・後期とも遺構を確認出来なかったが，後期の土師器片が少量出土しており，近隣に該期の遺構の存在が推察される。さらに，中世の土坑より後期の円筒埴輪の小片が1点出土した。最寄りの吉田古墳群との関係が想起され，終末期の1号墳の周溝からも該期の円筒埴輪が出土しており，古墳群の成立時期や広がりを考える上で貴重な資料となる。

奈良・平安時代 この時期も遺構は確認されなかったが，少量の土師器・須恵器が出土した。第1地点の調査では8世紀後半～10世紀前半にわたる竪穴建物跡が38軒，工房跡，粘土採掘坑などが確認されており，今次調査区まで集落の広がりを推測し得る。

中世 当地は第2章第2・3節に記した通り，該期には吉田神社とその別当薬王院を中心とする影響下にあり，北東約800mに所在する吉田城跡はじめ近隣の各遺跡よりこの時期の遺構・遺物の存在が知られる。今次調査区では，土坑（SK-5）内より古瀬戸の瓶子Ⅱ類，折縁深皿など藤澤編年後Ⅱ期（14世紀末～15世紀初）の遺物が出土している。本跡は北西隅を確認したのみで，遺構の性格を明確にし難いが，確認面からの深さが約1mで壁が直立することから地下式坑もしくは方形竪穴等の性格が推察される。なお，天井部落下の痕跡が見られず，底面及び壁に改修の形跡が認められることから，方形竪穴の可能性を強く感じる。しかし，地下式坑・方形竪穴等の用途については，集落・屋敷跡関連，葬送関連の施設等々諸説あり，箇々の遺構だけでは判断し難いところである。遺構群での検討が必須であり，近隣におけるさらなる資料の蓄積に期待したい。

注1 鈴木素行氏のご教示による。なお，理解不足や表現方法に誤りがあればすべて筆者の責に帰す。

（水野）

写 真 图 版

写真図版 1



A. 調査区全景 (南東より)



B. 調査前 (北より)



C. 遺構確認状況 (南東より)



D. 調査区全景 (北西より)



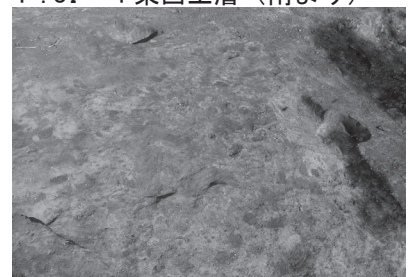
E. 基本土層 (東より)



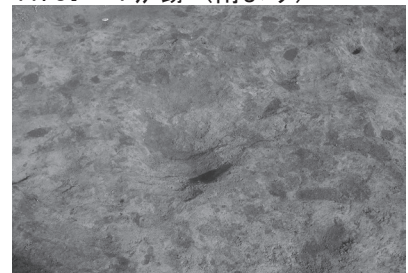
F. SI-1 東西土層 (南より)



G. SI-1 完掘 (南より)

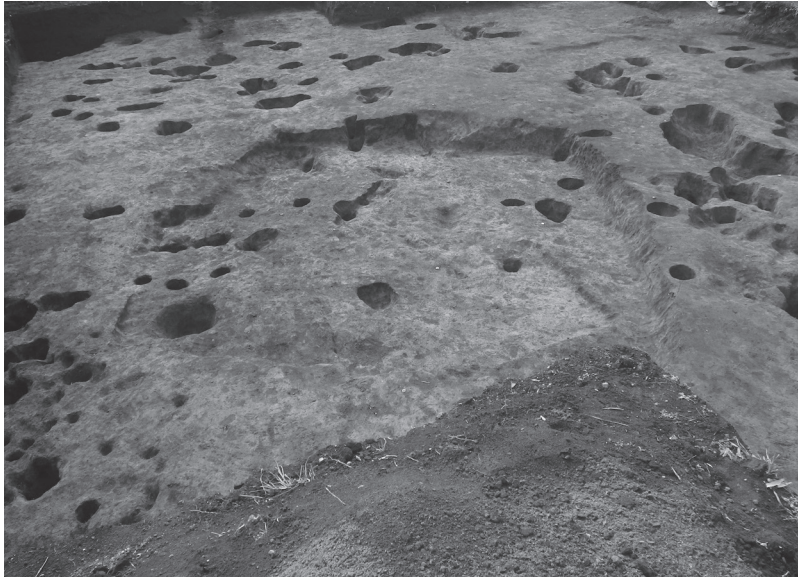


H. SI-1 炉跡 (南より)

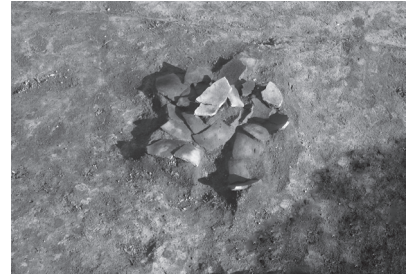


I. SI-1 炉跡掘方 (南より)

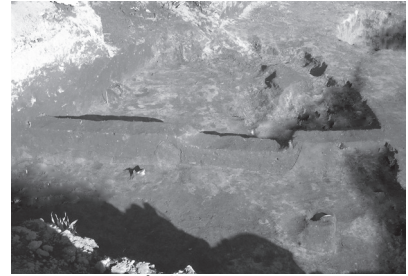
写真図版 2



A. SI-1 完掘 (北より)



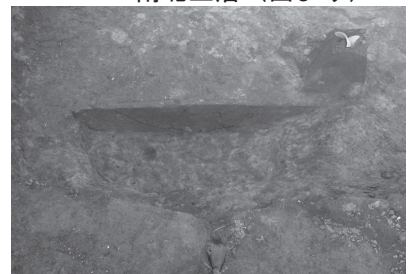
B. SI-1 遺物 (第6図9) (南より)



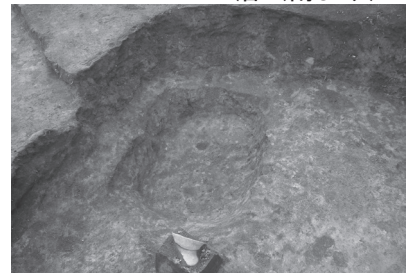
C. SI-2 南北土層 (西より)



D. SI-2 遺物出土状態 (南より)



E. SI-2・P3 土層 (南より)



F. SI-2・P3 完掘 (東より)



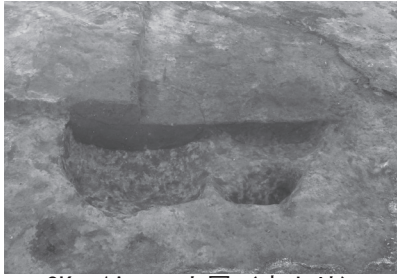
G. SI-2 完掘 (東より)



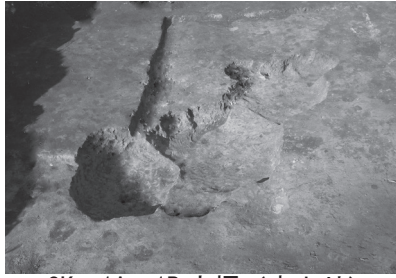
H. SI-2 遺物出土状態 (南より)



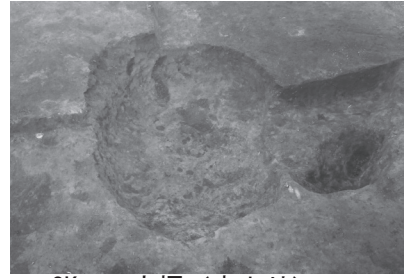
I. SI-2 遺物 (第8図7) (南より)



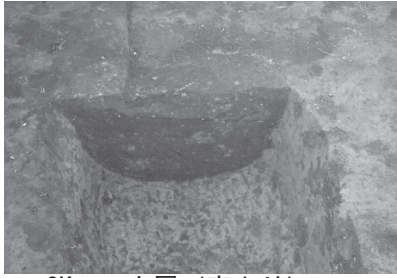
A. SK-1A・2土層（南より）



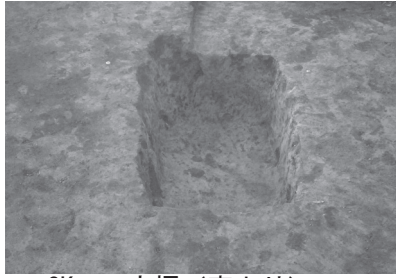
B. SK-1A・1B完掘（南より）



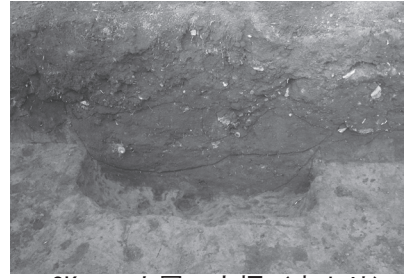
C. SK-2完掘（南より）



D. SK-3土層（東より）



E. SK-3完掘（東より）



F. SK-4土層・完掘（南より）



G. SK-5完掘（北より）



H. SK-5西壁（北東より）



I. SK-5土層（北より）



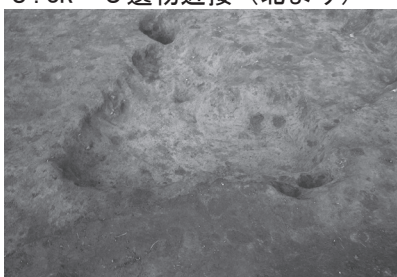
J. SK-5遺物近接（北より）



K. SK-6A土層（東より）



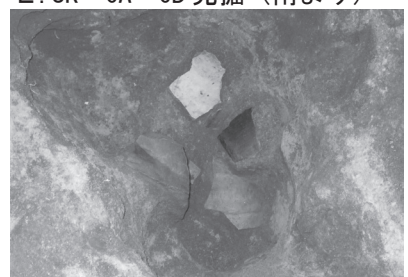
L. SK-6A・6B完掘（南より）



M. SK-7完掘（南より）

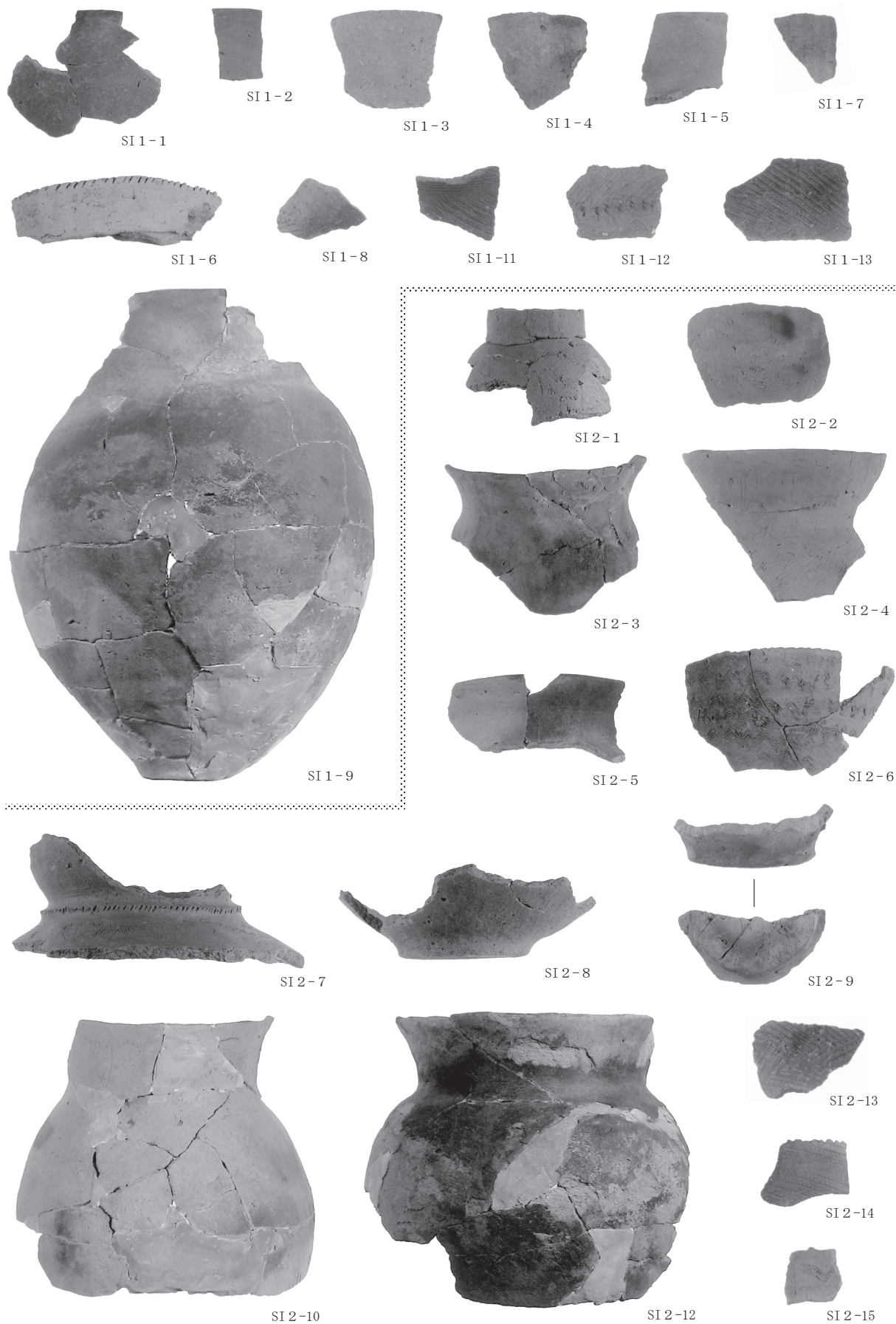


N. P-2完掘（北より）



O. P-2遺物近接（北より）

写真図版 4



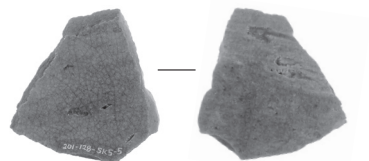
SI-1・2 (1) 出土遺物



SI 2-11



SK 5-1



SK 5-3 (R)

SK 5-3



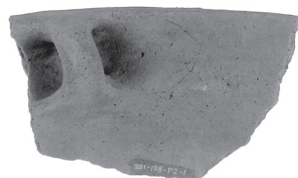
P 2-1



SK 5-2 (R)



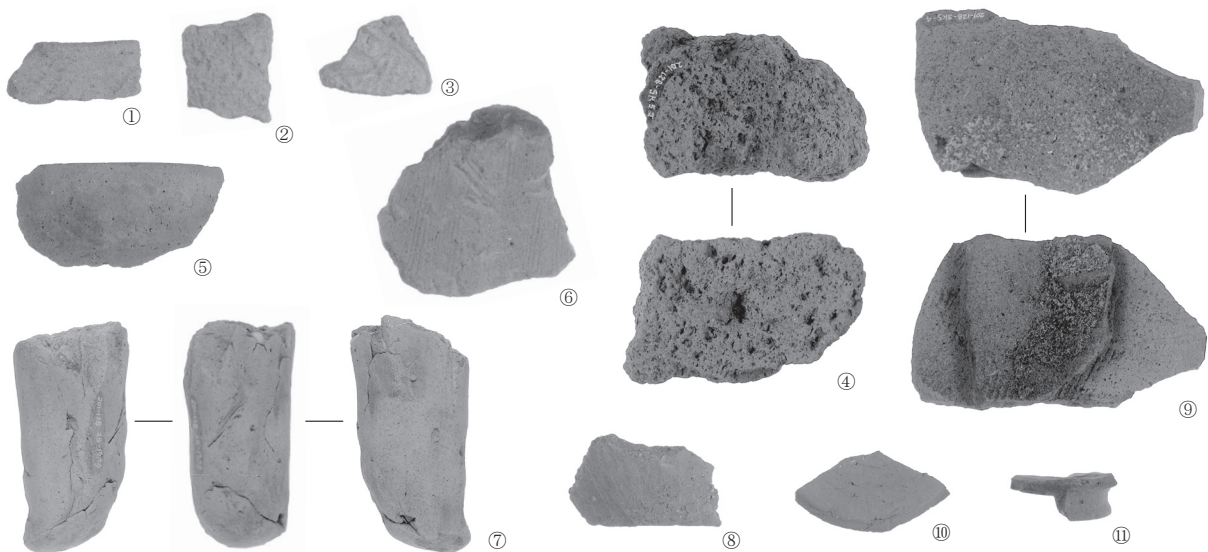
SK 5-2



P 2-2 (R)



P 2-2



SI-2 (2), SK-5, P-2, その他出土遺物

報告書抄録

ふりがな	やくおういんひがしいせき (だいろくちてんだいさんじ)							
書名	薬王院東遺跡 (第6地点第3次)							
副書名	—集合住宅建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—							
シリーズ名	水戸市埋蔵文化財調査報告第101集							
編集者名	水野順敏							
著者名	新垣清貴・水野順敏							
編集機関	株式会社日本窯業史研究所	所在地	〒324-0611 栃木県那須郡那珂川町小砂3112 ☎ 0287-93-0711					
発行機関	水戸市教育委員会	所在地	〒310-8610 茨城県水戸市中央1-4-1 ☎ 029-224-1111(代)					
発行年月日	2018 (平成30) 年 8 月 25 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
やくおういんひがしいせき 薬王院東遺跡 (第6地点 第3次)	いばらきけんみとしもとよしだちよう 茨城県水戸市元吉田町573- 1	08201	128	36° 21' 36"	140° 28' 44"	2018/01/26 ~ 2018/02/07	142.0	集合住宅建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
薬王院東遺跡 (第6地点 第3次)	集落跡	縄文時代	—	縄文土器, 石器		弥生時代末葉～古墳時代 前期にかけて堅穴建物跡 2軒を確認, 中世の土坑 より古瀬戸の瓶子等が出 土, 14世紀末～15世紀初 め頃の土地利用を示す。		
		弥生～古墳時代初	堅穴建物跡	弥生土器, 土師器				
		古墳時代後期	—	土師器, 埴輪				
		奈良・平安時代	—	土師器, 須恵器				
		中世	土坑・小穴	陶器, 土師質土器				
時期不明	土坑・小穴							
要約	確認された遺構は古墳時代前期の堅穴建物跡2軒, 中世の土坑・小穴などで, 古墳時代の堅穴建物跡では土師器と弥生系(十王台式)土器が供伴した。							

水戸市埋蔵文化財調査報告第101集

薬王院東遺跡 (第6地点第3次)

—集合住宅建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

印刷 平成30年 8 月 25 日

発行 平成30年 8 月 25 日

編集 株式会社日本窯業史研究所

発行 水戸市教育委員会

印刷 下野印刷株式会社

〒320-0061 栃木県宇都宮市宝木町1-28-11